
濃霧一人を喰らいし者達

Fake

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

濃霧―人を喰らいし者達

【Nコード】

N9584N

【作者名】

Fake

【あらすじ】

父親の殺人がきっかけで、幼少より続けていたボクシングをやめた海野翔一。

陸上部のエース山内美羽。

パソコンのスペシャリスト、森祐樹。

極悪の不良桐谷圭。

弓道一筋菅野芳美。

五人は高校の修学旅行で、とある漁村の離島に行く事になる。

そこである事をきっかけに、島が濃い霧に包まれる。

霧が島を包むと、島民たちが、人間ではないおぞましき生き物に変わりを遂げる。

5人の主人公達が、閉鎖された島の中から、どのように脱出を遂げるのか。

また、一人一人が抱えている問題と向き合いながら、個々が成長していく物語でもあり、サバイバルホラーでもあります。

惨劇への序曲（前書き）

「彼岸島」の映画を観て、非常に面白いと感じたのですが、
個々の仲間達が、それぞれ何かの特徴を持っていたらもつと面白か
ったのではないかと思い、書いてみることにしました。

2次ではありませんが、似たようなお話にはなると思います。

惨劇への序曲

海野翔一は、離島へ向う連絡船の先頭で寝転がっていた。日差しが眩しかったが、中に居るうるさい連中と一緒に居たくなかった。

今日は高校生活最後の修学旅行。だが、翔一にとっては何の興味もなかったし、むしろさばりたかった。だが、担任の教師が単位がどうか、強制だとかを抜かすので、仕方なく参加したのだった。

もう一度目を閉じると、大きな影が自分を覆うのが分かった。

「翔一。そんなとこいないで、中に来なよ。」

山内美羽。子供の頃からの幼馴染である。とにかくうるさくて、一緒に居たくない存在だった。身長は160台後半で、黒く長い髪はゴムで縛り、細身で、男子生徒からは非常に人気があった。

だが、陸上部の短距離、中距離で全国大会優勝経験のある美羽。そんな彼女は、半分人生を投げ捨てている翔一が存在が鬱陶しかった。まだ10代であるにも関わらず、人生が終わりを告げているかの様な顔をしている、翔一が。

翔一は、幼少の頃よりボクシングを習っていたが、ある事件を境に全くやらなくなり、そして人生までも自分で腐らせてしまった。

そんな翔一を、美羽は大嫌いだった。男らしくない、生きている

のか、死んでいるのか分からないような翔一を見てみると、吐き気がする程だった。

「うぜえからあっちいけ。」

翔一は美羽にそう吐き捨てた。美羽は何も言わずその場を去る。船内に入ろうとする美羽と、160ちよつとの身長でやや太目の少年がすれ違った。

「やまう……。その顔は……。やっぱり翔一駄目か。」

「ほつとした方がいいよ森！修学旅行まで来て、一人で居て何が楽しいんだか！あの馬鹿！」

すごい剣幕で怒鳴りちらし、美羽は船内に入ってしまった。森祐樹は、去っていく美羽の姿を見て、顔をひきつらせた。

「こええ……。」

祐樹は翔一に近づいてく。ゆつくりと近づいて、脅かそうとした。ゆつくり……。ゆつくり……。

「なんだ？祐樹？俺はここにいるから戻れよ。」

「わあ！気づいてたのかよ！」

祐樹は、翔一の寝ている横に座ると、口を開いた。

「ネットも使えないし、女子がいるからエロスなゲームも出来ないんだよ！お前のせいだぞ翔一！」

パソコンオタクの祐樹が笑いながら言った。祐樹は今でこそ明るく、友達も沢山いるが、小さい頃は本当に気が弱く、運動神経も悪かったので、いじめられてばかりいた。だが、それを毎回助けたのが、翔一だったのだ。

翔一も弟的存在なのか、祐樹にだけは完全に心を閉じていなかった。

「なあ翔一。彼女・・・欲しいな・・・。」

祐樹が綺麗な青空を見上げながら似合わない台詞を語る。

「お前、現実の女はいらないだろ。」

「ばれてたあ!？」

翔一も思わず笑ってしまう。祐樹は翔一の肩を叩いて、立ち上がった。

「島着いたらさー。五人で遊ぼうぜー!なー!俺からのお願いー!」

「気が向いたらな・・・。」

祐樹の方は見ずに、翔一は答えた。

「遊ぶって・・・何をすんだよ・・・。」

せっかく寝ようと思っていたのに、二人も客が来るもんだから、

寝れなくなってしまった。

「うえ……。」

どうやら船酔いしたようで、頭が気持ちが悪い。
海に向って嘔吐した。

「馬鹿野郎……。クソオヤジ……。」

止まらない吐き気と同時に、自分の父親の顔が脳裏に浮かんだ。
子供の頃からやりたくもないボクシングを叩きこんだ馬鹿父親。

二年前肩がぶつかつたのぶつかつてないのでイチヤモンを付け、
人を殴り殺した殺人者のクソ父親。
翔一は自分の拳を見て、心底むかついた。この拳に奴から仕込まれたボクシングの技術が染み込まされている。

翔一はボクシングをやる気はもう二度となかったし、絶対に拳を使わないと誓っていた。

あの馬鹿親と同じ技術なんて必要ない。翔一は、父親が殺人で逮捕されてから、散々と白い目で見られてきた。
それまでは明るかった彼も、自分自信も、周りの世界も急変した。

それから二年。彼はこんな冷め切った状態にいる。

その時、誰かが背中を擦った。振り返ると、そこにはショートカットの可愛い女子生徒、菅野芳美が居た。
弓道が好きで、美羽は美人系、芳美は可愛い系でモデルにも関わらず、男には全く興味はなかった。

語る事は弓道の事ばかり、だが、なぜか、翔一は芳美の話を聞いていると気持ちが落ち着いた。

それは恋愛対象とかではない。彼女が持ち合わせている、「癒し系」というものののだろうか。

「海野君さ。島に着いたらボクシングごっこ、桐谷とやってよ。」

無邪気に微笑む芳美。他の奴に「ボクシング」と言われればそれだけでむかつくが、芳美には全く悪意がないので、なんとも思わない。

「なんであの馬鹿とボクシングごっこしなきゃなんねえんだよ。俺は何もやらねえ。向こうの宿で帰りまで寝てる。」

えー！という驚きの顔をする芳美。

「それじゃあ旅行に来た意味ないじゃん。」

「俺は来たくなかったんだよ。お前だって分かるだろ。」

芳美は、無表情で翔一を見つめた。目を反らさない。翔一は少したじろいだ。

「な、なんだよ……。」

芳美はニコリと微笑むと、

「じゃあ、私の弓の的になってよ。頭にリング乗せて。」

そして芳美は屈託なく笑った。翔一は自分の口元が緩むのが分かったが、

すぐに仏頂面に戻した。

「んなもん、祐樹にやつてもらえよ。」

そして、また船頭に戻っていった。

島はもうそこまで近づいてきている。

「おお！おお！海野！おいおい！ここにいたのかよ。彼女と。」

現れたのは桐谷圭。学校一の不良で、身長は185、元空手部でその腕前は黒帯保持者。

しかし、喧嘩っぱやい等というレベルではなく、気に入らなければすぐに人を殴り、顧問までも病院送りにしてしまった。

だが、群れるのが嫌いで一匹狼。友達には居ないが不良の敵はそこらじゅうにいる。ある時、翔一の父親の話や、彼がボクシング経験者である事を知り、喧嘩を売りに行った事があった。

だが結果は、蹴ろうが殴ろうが、翔一は殴り返しもせず、そして攻撃もヒットしなかった。

むしろ手数を出しすぎた桐谷が疲れ果て、

「じゃあ、俺行くから。」

と翔一に言われ、去って行かれた。それ以来、桐谷が一方的に翔一を気に入っているが、翔一の方は、まあどうでもいいという感じだった。

「なあ海野、菅野、お前ら、何処まで行っただ？いて！！」

芳美に思い切りビンタをはられた桐谷。そして翔一は立ち上がり、桐谷に近づいてきた。

「あ！？冗談だろ！？そんなに怒るんじゃないよ。」

「俺と菅野はただの、知人だ。友達でもない。お前と俺もな。」

無表情で語る翔一を見て、桐谷は思った。こいつは同類だ。俺と同じ人間なんだ・・・。

それを聞いた芳美は、涙が出そうになるのを堪えた。

桐谷は最近友達になったが、翔一、美羽、祐樹、芳美は幼馴染だ・・・。それをただの「知人」とは。

もう目視出来るところに島が見えてきた。以外に大きな島である。島民の人達が、船着場から手を振ってくれている。

しかし、突如として空は曇り始め、天候が悪くなってきた。

今、この島での惨劇が、始まるうとしていた。

惨劇への序曲（後書き）

誤字脱字だらけでした。修正しました。申し訳ありません。

島の守り神 崩壊（前書き）

だんだん始まっています。

島の守り神 崩壊

「早速だけど、雨が降りそうだから、旅館に行きましようかね。」

島に辿り着いた翔一達。だが、急に空には暗雲が立ち込め、大降りになりそうな気配だった。

翔一にとっては、どちらにせよずっと旅館で寝ているつもりだったので、好都合だった。

「どうせ喜んでんでしょ。」

美羽が近づいてきて、翔一にふてくされた顔をする。翔一は完全に無視をしながら旅館への坂を歩き続ける。翔一は完全むかつと来た美羽は、芳美の横へ行った。

「あの馬鹿さ！」

芳美は美羽の怒る顔を見て微笑む。

「まあまあ。美羽もそれじゃ、翔一と同じレベルになっちゃうんじゃない？」

「言うねー。芳美も。」

芳美からすると、なぜにここまで翔一と美羽が仲が悪いのか分からなかった。昔は本当に仲が良い二人で、

天然な芳美でも二人の關係に気が付いたぐらいだ。

「どっちにせよ雨だし、私も弓の練習出来ないし、みんなでトラ

ンプでもしよ。翔一は来ないなら来ないでいいんじゃないかな。」

美羽は満面の笑みを浮かべると、「あんな馬鹿一人でいいもんね！」と嬉しそうにした。
相当に嫌いなのである。

「なーマニアー。」

桐谷がごつい腕を、祐樹の首に回す。

「山内とは付き合ってたのか？」

祐樹がびびりながら答える。

「ま、まさか！僕はタダのオタクじゃん！」

桐谷がだよなーという顔をした。

「いい女だよなー……。なんで男いねえんだろうな。海野と菅野もいい感じなのに付き合ってたえっていうし、てか、4馬鹿ってふつーの顔した男一人、超不細工の男一人、相当な美人一人、相当な可愛い系一人、って不釣り合いすぎだな。」

「桐谷だって俺達のグループじゃんかよ。お前はイケメンじゃないかよ。こええけど……。」

桐谷は祐樹に「俺達のグループ」と言われ、驚いた。

「俺が？一応勝手にくつついてはいるけど、仲間じゃねえだろ。」

祐樹は、思った。確かに知り合う前はとんでもない奴だと思ったが。

「だけど、今は友達なんじゃないの？俺も、菅野も山内も、そう言ってるよ。これはお前が怖いから言ってるんじゃない。」

桐谷は嬉しかった。友達なんか要らない。そう思ってた生きてきた理由もあったけど、ただ、純粹に嬉しかった。

「海野は俺の事嫌いだろうな。」

「翔一は、誰も好きじゃないよ……。あの事件が起きてからはね……。」

その時雷が鳴り響いた。物凄い轟音で、すぐ近くに落ちる事が予想できた。女生徒達はあまりの音と光に叫び、旅館へと走る。

すぐに大雨が振り出し、すぐ近くで話しても聞こえないぐらいになった。

旅館に辿り着いた翔一達のクラスは、先に入浴する事になった。翔一が自分の部屋へ行こうとすると、旅館の仲居さん同士の話が聞こえた。

「ね……ねえ……。さっきの雷で、神木様が……。焼け落ちたって……。」

もう一人の仲居が青ざめる。

「そんな！！神木様がなくなったら、濃霧が！早くこの島から出ないと！」

神木？濃霧？何を訊わかんねえ事言っただ、と翔一は思った。まあ、どうでもいいや。いつも通りそう思い、持ってたタオルで頭を拭きながら、部屋に行く。

四人一部屋。先に桐谷と祐樹は来ていて、もう一人暗い感じの男が居た。名前は確か山瀬だ。下の名前は知らない。何せクラスでも常に下を向いており、誰とも喋ろうとしない。運動神経が非常に悪く、勉強も出来ない、典型的ないじめられっこだった。

無論部屋決めの時も揉めたが、祐樹が山瀬を誘った。桐谷と翔一は誰と一緒にでも別に構わないのでどっちでも良かった。

「おお海野。待ってたぞ。もう体気持ちわりいし。早く風呂行こうぜ。デブは汗と雨の臭いで大変な事になってるしよ。」

デブとは祐樹の事である……。

「山瀬君。風呂一緒に行こうぜ。」

祐樹が山瀬に声をかけると、彼はぶつぶつ呟いている。

「……んだ……。」

何を言っているか分からない。桐谷が近づくと、

「……死ぬんだよ……。」

桐谷が爆笑して聞いた。「だゝれが死ぬんだよ！？俺？」

「全員が死ぬ！この島は普通の島じゃないんだ！御神木が！」

神木・・・？翔一は先ほど聞いた言葉を思い出した。そういえば、山瀬はオカルトマニアだかなんだったって、クラスの馬鹿が虐めてたな、そう思った。

「山瀬、神木ってなんだ？この島、幽霊でも出るのか？」

冗談で尋ねる翔一。山瀬は、急に顔を上げて翔一の方を掴んだ。

「逃げよう！逃げないと本当に全員死ぬ事になる！船！船！」

山瀬は荷物をまとめて部屋を出ようとする。祐樹がそれを引きとめた。

「今は波が高すぎて船出せないよ！明日以降だって。寝ればすぐじゃん。な？落ち着こうよ山・・・」

肩に手を乗せた祐樹の手を振りほどき、山瀬は部屋を飛び出していった。

桐谷は爆笑し、翔一は半笑い。だが、翔一は気になっていた。地元に住んでいる仲居が、あれ程気にしていた

「神木」というもの。

そして「濃霧」という言葉。だが、やはりまあいいかと思い、三人で大浴場へと向った。

それが皆がゆつくりと浸かっていられる最後の入浴になるとも思わす。

明かされる伝承

入浴を済ませた一行は、旅館の外に鳴り響く雷雨に一抹の不安を覚えていた。

それは、旅館の従業員達の表情が、皆青ざめており、気が気ではないという感じであつたからだ。

翔一、桐谷、祐樹は、自室に戻って寝転がっていた。テレビを点けても、雷の音が激しすぎて、全く音声が聞こえない。

山瀬は荷物をまとめたまま、結局降りしきる豪雨の中、波止場へと走っていったらしい。

教師達が探しに行ったが、彼の姿はみつからなかった。

「あの馬鹿。落ちたんだろ。」

桐谷が音の聞こえないテレビを見ながら呟いた。翔一は腕を組んで天井を見つめている。

祐樹は持ってきたパソコンをいじっていた。

「あ！」

急に祐樹が声を上げる。桐谷が「おい！いきなりでけえ声出すなよ！」と怒った。

翔一が、どうしたんだと祐樹に近づくと、パソコンの画面にこの島の写真が載っていた。

「オカルトサイトだ……。名も無い小さな漁村だけど、このサ

イトによると濃霧島と呼ばれているらしいよ。
なんでも、霧が立ち込めると、とんでもない事が起こるとか・・・
」

翔一は画面を覗き込む。「死人の群れ・・・。霧を吸い込んだ者は死人になり、他の人間を・・・食らう。」

桐谷が爆笑した。

「あははは！じゃあ、なんで今までこの島に居る奴らは生きてるんだよ。霧吸って死ぬなら全員化け物になってるし、この島は自衛隊にでもやられてるだろ。」

桐谷はずつと笑っている。だが翔一は腑に落ちなかった。

最初に聞いた中居達の会話。そして、館内全員の従業員の曇った表情。

何か悪い事が起きる。そう思い始めていた。

ガラといきなり襖が開いた。美羽が立っている。後ろには芳美。

「ご飯だつて。それで何か女将さんから話があるらしいよ。なんか歓迎の話じゃなくて、
すごく大切な話だから必ず来るようにつて。」

翔一は、すくつと立ち上がった。美羽や他の皆も、ずっと寝転がっていそつだった彼の行動に驚いた。

「何してんだよ。早く行くぞ。」

翔一は、美羽と芳美の間をすり抜け、食堂へと向う。四人は呆気に取られていたが、付いていった。

食堂に入って驚いたのは、食事が用意されていない事だ。広い部屋中央に、菓子パンやら、お菓子やらが山積みになっている。そして従業員全員が列をなして立っていた。

他の40名余りの生徒や、教師達も集合していて、翔一達で最後だった。

女将が、語りだす。

「大変申し訳ありません。大変な事が起きてしまいました。とても皆さんに食事を採って頂いている時間はありません。どうかこの携帯食料を持って、すぐに我々に付いて来て下さい。」

生徒達から野次が飛んだ。わけがわからない。

「説明している暇はありません！ここに居れば全員が死にます！というより・・・、我々があなた方を殺してしまいます・・・。」

翔一は冷静に聞いていたが、どうしても聞きたい事があった。

「さつきネットで見たんだけど、濃霧ってのが関係あるのか？」

女将は静かにゆっくりと頷いた。

「伝承の様な話になります。詳しくは割愛しますが、この島を守り続けてきた神木様が、先ほど焼け落ちてしまいました。神木様がその濃霧と呼ばれる霧を防いでくれたのですが、木が焼け落ち

た今、霧が出始めるのは時間の問題です。そしてその霧は、あなた方若い世代の人間には影響を及ぼしません。ですが、」

女将は一呼吸置いて続けた。

「我々大人は、人を切り裂き、喰らう化け物へと変貌してしまうのです。信じられないでしょう。我々はそれを防ぐ手段がありません。鬼へと変貌した我々は、理性を失い、貴方達を襲います。信じない方はここに残ってください。霧が晴れる明日の昼になれば、船を出す事が出来ます。」

そして女将は、隣に居た少女を紹介した。

「この子は私の娘です。ここから10km先の高台に、病院があります。そこに立て籠もってください。」

この子が案内します。朝まで凌げればなんとかかなります。それから我々に襲われたら容赦なく頭を破壊してください。遠慮は無用です。では、一刻も急いで！」

女将の話が終わった途端パニックが起こった。ほとんどの生徒は混乱し、玄関から飛び出し船着場へと走る。部屋に籠る者たちもいる。

翔一は素早く食料をもてるだけ持って、部屋へ駆ける。桐谷、祐樹も同じように走り、勇気は美羽と芳美に目配せした。彼女達も部屋と走る。

「何がなんだかわからないよー！」

祐樹がバッグにパソコンを詰める。桐谷は笑った。

「おいおい！ホラー映画かよ！いいじゃねえか化け物。殺るか殺られるかだな！」

翔一は、荷物を持って自分の拳を見つめた。

もし、この話が本当なら、あの馬鹿から教わった技が、役に立つのかもしれないと・・・。

美羽は、陸上用のスパイクをリュックから確認していた。メーカー物で非常に軽く、早く走る事が出来る。

芳美は、わざわざ持ってきた弓道具一式を背負う。

「そんなの置いていきなよ芳美！」

「無理無理！私の宝物だもん。」

こんなときでも芳美は笑っていた。そして芳美は、美羽にある物を見せた。

「これって・・・ボクシングのグローブ？」

芳美はニコニコと微笑むと、

「翔一と桐谷のボクシングごっこがみたくて安いのが買ったんだ。二人強いから、守ってくれるよ、きつと。」

美羽は、芳美の笑顔見て答えた。

「翔一は、生きる気力ないよ・・・。」

そして、食堂に五人は集まり、他の生徒は10人しかいなかった。教師達は、泣き叫びながらどうにかしてくれと従業員女将にしがみついている。

「それじゃ頼むよ珠美！」

女将が少女に向っていった。「ついてきてください！」

翔一達他10名の高校生は、10km先にあるという病院を目指す。

あたりにはうつすらと霧が始めていた。

現れた異形の者達

「たまみ」と呼ばれた少女は、翔一達5名、他10名を引き連れて、

ひたすら山を登っていく。

珠美は何も喋らない。まだ中学生ぐらいだろうか。小柄の少女は、時々こちらを振り返りながら、先頭をスタスタと登っていく。

雨は豪雨で、歩くのもやつとの状態だが、その幼い少女は歩みの速度を落とす事なく、

どんどん登っていく。翔一達は、祐樹以外は体力があるので、なんとか付いて行っているものの、他のクラスメイト達が叫ぶ。

「おい！もっとゆっくり登ってくれ！」

しかし珠美は止まらない。それに耐えかねて美羽が叫んだ。

「ちょっと！こんな雨と泥の崩れた道、そう簡単に登れないよ！もう少しゆっくり登って！」

珠美は振り返りもしない。翔一もそんな美羽の言葉を無視して、ひたすら珠美に着いて行く。祐樹は息が切れ、今にも座り込みそうだ。

「ちょっと！聞いてんの！！もう少しゆっくり・・・。」

「うるせえ！死にてえ奴は待ってりゃいいだろ。死にたくねえ奴

はとにかく付いていくしかねえ。」

美羽に怒鳴ったのは翔一だった。桐谷が笑う。

「ふう・・・結構これキツイぜ・・・俺は別に死んでもいいけどよ。お前らは生きろ、美人二人。」

桐谷が美羽と芳美に言った。だがそんな桐谷も雨と汗と泥で、顔がどろどろである。

美羽と芳美は、祐樹に肩を貸した。祐樹は自分の情けなさに恥ずかしくなり、二人に先に行くように言う。

「翔一！祐樹を手伝ってあげなよ！親友でしょ！？」

翔一に追いついた美羽が肩を掴んで言った。翔一はその手を振り払う。

「親友じゃねえ、知」

「知人だよな。私たちも知人。でも知り合いなんだから、手助けぐらいしてもいいんじゃない？」

珍しく冷たい目で芳美が言い放った。一時睨みあう両者。これ程に怒った顔をした芳美を見るのは、皆、久しぶりだった。

翔一は無言で坂を降り、祐樹に肩を貸す。

「わりい・・・翔一。」

「いいから黙って登れ。」

五人組がほとんどハイペースで登っていくと、下の方で叫ぶ声が聞こえた。

「お前らスポーツ組だけで逃げようなんて汚ねえぞ！血も涙もねえやつらだな！」

「怪我してる奴もいる！助けてやってくれよ！」

他のクラスメイト達が口々に叫んだ。祐樹は翔一に言う。

「翔一、なんとかあいつらも・・・。」

「馬鹿か。知人でもねえ、赤の他人を何で助ける必要がある。」

翔一は冷たく言い放った。これがあの優しくて強かった翔一。祐樹が知っている翔一は、誰もから慕われ、誰をも助ける兄貴分だった。それがこんなに変わってしまい、祐樹は寂しかった。

五人は斜度のきつい崖をなんとか登りきった。目の前には珠美がいる。

「後5分。5分待って登って来れない人がいたら、そのまま、あそこの病院跡に行きます。」

小さな少女は無表情で話す。ジーンズに白いTシャツ一枚。おそらく可愛いというより美人になるだろうという彼女だが、あまりにも冷酷な表情をしている。祐樹はそれを見て寒気がした。

「霧・・・」

霧が辺りに立ち込めてきた。そして夏なのに寒気がする。温度による寒さではない。

人間の第六感による寒気である。

「うわああああ！」

崖の下から叫び声が聞こえた。五人は下を見下ろす。

眼下では、人ではない者達がクラスメイト達を襲っていた。

30cmはあろうかという長い爪。その爪は紫色に変色し、鋭く尖っている。口から流している血は、

下で倒れ、内蔵を切り裂かれた男子生徒の血であった。耳はとがり、眼球が飛び出し、白目の部分は真っ赤に染まっている。口を開くと激しく鋭い牙が見えた。

それは一人・・・いや、一匹だけであったが、遠くから声が聞こえる。

「ハラワタ・・・ハラワタ・・・」

「ハラワタ・・・」と連呼しながら、怪物の群れが迫っている。

嘘じゃなかった。翔一達一行は、眼下で起こっている惨状を見て、確信した。

女将の言っていた事は本当の事だったのだと。

そして今、男子生徒がその怪物から逃げ回っているが、四つんばいで駆ける化け物の速さにすぐに追いつかれる。

「翔一！助けてあげて！」

美羽が翔一に叫ぶ。翔一は畏怖した。なんなんだあれは……。
なんなんだよ……。

翔一はそれしか考えてなかった。

「翔一！あんたなら勝てるでしょ！芳美がグローブ持ってる。よし……。」

芳美の方を見た美羽は驚いた。美羽が芳美を見た瞬間。芳美は弓を構えていて、そしてそれを放った。芳美の放った弓は、化け物の頭部を見事に貫いていた。

「キイイイイイ！」

なんと、芳美が下に居た化け物を弓で射抜き、ピクピクと痙攣している。そして段々と動かなくなっていた。掴まれていた男子生徒は腰を抜かしている。

「早く上がってきて！みんな！死にたくなかったら早く！」

芳美が叫ぶ。翔一は芳美の姿を見て、何も出来なかった事を情けなく思った。

（やっぱり俺はカスだな）

翔一は心の中で呟き、崖の下を見るのは止めた。

芳美に助けられた男子生徒、残った他9名は物凄い勢いで坂を駆け上がり始めた。

しかし、下には10を超える化け物達が、牙から涎を垂らし、眼
球をぎよるぎよるさせ、四足でこちらに
駆けてきていた。

化け物達の正体

崖の下では、残った生徒達が必至で駆け上がって来る。だが、もう数mの所に10体余りの化け物の群れが迫っている。

芳美は、目を閉じ、精神を集中し、奴らに狙いを定めていく。そしてまた一匹の頭骸骨をヒュッと撃ち抜いた。

「行くぞ菅野！弓しまえ！あいつらすぐに登ってきちまう。早く行け！俺が1分でも食い止めてやらあ。」

そう言つて、桐谷は体を動かし始めた。空手の有段者。真面目にやっていたら、この若さでも達人の域に入るほどであった。桐谷は死が怖くない。むしろ、死に直面する場面を楽しむ男である。

「菅野、桐谷、祐樹、山内、行くぞ。」

翔一が三人を見ず、珠美に着いて行こうとする。美羽が叫んだ。

「馬鹿野郎！」

美羽は翔一に叫んで崖から飛び降りようとした、間一髪芳美が抱きとめる。

「もう駄目だよ美羽。助けたいけど、もう助けられない……。」

芳美は涙を浮かべていた。その時珠美が声を発した。

「5分経ちました。では行きますよ。」

その時、一人の男子生徒が崖を登ってきた。安藤透である。

「も、もう他の奴らは駄目だ！今あいつらは、あいつらは！みんなを食って・・・おえ・・・。」

祐樹が安藤に近づく。

「行こう！あそこの病院に立て籠もれば助かるらしいから！」

「うううう・・・。」

安藤透は泣いていた。自分が必至で逃げて登る間、下では断末魔の叫び声が聞こえ、

そして内臓を取り出され食い散らす化け物達。

生き残った6人は、相変わらず無表情で歩く珠美に黙って付いて行く。

「妙だと思わない？」

美羽が芳美に耳打ちした。

「自分のお母さんもあいつらみたいになるのに、なんであの子あんなに冷静なの？それになんか・・・。」

「うん・・・怖い・・・。」

美羽の言葉に芳美も反応した。その時、珠美は皆に見えないようにニヤリと口元を歪ませた。

廃病院。もう十年以上は使われていないだろう病院だった。
翔一が叫んだ。

「バリケードだ！なんでもいいから奴らが入って来れないように
物で塞げ！安藤も頼む！」

「あ・・・ああ！」

その時、入り口の奥で物音がした。そして、こちらに何か走っ
てくる音がする。

芳美は弓を構え、翔一もファイティングポーズをとった。桐谷は笑
いながら空手スタイルを取る。

現れたのは、なんと、死んでいたと思っていた山瀬だった。

「山瀬生きてたのか・・・。」

祐樹が近づいてく。山瀬は話し出した。

「海はみんなの言うとおりとてもじゃないけど駄目だった・・・。
でも旅館に居たら確実に死ぬって分かった。どうせ僕は友達もい
ないし、一人で隠れるしかなかったんだ・・・。」

山瀬の言葉を、先ほど半信半疑で聞いていた翔一は、よく知りも
しなかったクラスメイトが生きていた事が、

少なくとも嬉しくはなかった。喋った事もなかったとは言え、
目の前で同い年の人間が、無惨にも食い殺されていったのだから。

「よし！じゃあバリケード作ろうぜ！山瀬も手伝ってくれ！リー

ダーの命令だからよ！」

桐谷が笑いながら言った。その瞬間、信じられない言葉が聞こえた。

「その必要は無い。」

それは、珠美だった。

「お前達はここで死ぬのだ。母達の餌となるのだから。それにバリケード等作っても意味がないぞ。」

皆、驚愕した。急に大人びた声を発し、先ほどよりも更に不気味な笑みを浮かべ、7人に淡々と語りかける。

「何言ってるの？珠美ちゃん……。」

珠美はその瞬間。3m程宙にジャンプした。そして何と、珠美は宙に浮いていた。

「どうせ死ぬお前らに教えてやろう。霧が成人だけ化け物に変え
ると言うのは嘘だ。変身するのは我々、けっが血牙一族だけである。だからお前らの教師は、既に、母達の餌となっているだろう。くくく・
・。」

「菅野、あいつ殺せ。」

翔一が芳美に言った。芳美は一瞬躊躇したが弓を構える。

「お前らをここに連れてきたのは、狩りをするためじゃ。そのま

ま殺しては面白くない。我々一族は、濃霧により血牙となるが、理性は残っており。だから、お前ら人間共を殺す楽しみを憶えておきたいのだ。」

芳美が矢を放った。しかしそれは、珠美に避けられる。

芳美が連続で矢を放つが当たらない。

「旅館の人間はほとんど人間だ。だが、この島に居る者たちは全員我々一族のものである。

その数は100以上。お前らヒトのガキではつまらんのう。300人は欲しかったのう。」

そうして珠美は高らかに笑った。

「ふん・・・だけど霧が晴れたら変身解けるんだろうが、そしてら、お前の母親も殴り殺すからな。」

翔一が無表情で珠美に話す。

「ははは！それはない！神木がなくなった今、霧が晴れることはない！唯一我々の力を封印出来る人間と、お前らが合流できれば、なんとかなるやもしれんが、たった7人で100人相手には出来んじやろ！」

高らかに笑い、珠美は病院の窓に物凄いスピードで体当たりし、そのまま駆けて行った。

7人は珠美の姿を見たが、既に彼女の姿は見えなくなっていた。

「つまりあれか・・・。ゲームって事だな？要するに。馬鹿の俺でも分かるぜ！」

桐谷はニヤニヤとしている。そして空手の型を始めた。「10匹は殺してやる。」

急に引き締まった表情になる。

「俺の事を友達だと言ってくれたお前ら助けるために、一匹でも多くあいつら殺してやるからよ。」

海野には適わねえけど、切れた俺は結構つええよ。あいつらの頭、正拳で砕いて、蹴りで骨ごと砕いてやるから。」

桐谷は、動きながら語った。祐樹が動く。

「ここって病院だから薬品残ってないかな。俺結構武器になるもん作れるんだ。火炎瓶とか簡単だから、ちよつと探してくる！」

祐樹は駆けて行った。山瀬は何かを呟いている。

翔一がどうしたのか尋ねた。

「確か、ネットで濃霧を封印する方法があったと思うんだ……。思い出そうとしても思い出せない。」

すると美羽が山瀬に祐樹のパソコンを渡した。

「勝手に使っちゃいなよ。方法調べて！」

山瀬は「うん」と頷くと、調べ物を始める。

「海野。これ。」

芳美が翔一にグローブを渡した。それは、ボクシンググッズのメーカー物だった。

「これ・・・ウィーニングの最新モデルじゃねえか・・・。こんな高いもん。」

「ボクシングごっこ、みたかったからね。桐谷のはドンキで買った千円のやつ。」

翔一はそのグローブを見て、ボクシングをやっていた頃の自分を思い出した。

翔一の父親は、ボクシングは弱いものいじめに使っくんじゃねえ。拳はリングの上で使え。

絶対普通の人には振るうなど、小さい頃から言われてきた。

なのに人を殴り殺した元プロボクサーの父親……。詳しくは知らないし、知りたくもない。

だが、今は、もう二度と使わないと思っていた拳だったが、あいつらは人じゃない。化け物だ。なら、殴り殺しても構わないと思った。

「ありがとな、菅野。俺一人で50匹殺してやるよ。」

「頼りにしてるぞ!」

翔一が、いつ振りに見せた笑顔が分からなかった。美羽は安藤とバリエードを作っていた。安藤は体が震えている。

「男でしょ！シャキツとしなさい！」

「俺は、君ら五人とは違うよ。何のとりえもないし・・・真つ先に死ぬのは俺だな・・・。」

美羽が自前のスポーツシューズで床をとんとんと踏んで言った。

「ほら！これ！そこに落ちてたバット。安藤野球部でしょ？何もしなきゃどうせ死ぬんだから、やるしかないよ！」

安藤はこくと頷いてバットを受け取った。素振りを始める。
安藤の思考は奴らの頭を吹き飛ばす事でいっぱいになり、目つきは男らしくなっていた。

今、生きるための戦いが、始まるうとしていた。

命を懸けた戦い

時間は無かった。先ほど崖下に居た10匹程の群れは、すぐにこの建物にやってくる。

翔一は、芳美がバンテージまで用意してくれた事に驚いた。

安物で指にかけるだけのものだが、これがあるのとないのでは、拳の威力も、拳にかかるダメージも全然違ってくる。

バンテージを巻き終わり、久しぶりにシャードーボクシングを始める。

先ほど見た化け物の動きを思い出し、イメージする。

（やれるはずだ・・・）

翔一は、そう心に強く念じた。

安藤と美羽は、バリケードを作っている。

「私、病院の屋上に行く。」

芳美が言った。屋上から弓を使おうと言っているのである。翔一は馬鹿なと思った。

「この豪雨では、上手く弓なんて使えないだろ。俺と桐谷、安藤が近接部隊で、

菅野は後ろから弓で討ってくれ。」

祐樹がどこからか走ってきて、リュックから大量の瓶を持ってき

た。火炎瓶である。

「これ結構強いからな。火をつけて投げるんだ。山瀬も一緒に投げしてくれ！」

「う・うん！」

山瀬が火炎瓶を受け取った。しかしその時、祐樹が叫んだ。

「ああ！肝心の火を点けるものがない！」

そついうと桐谷が笑いながら、ポケットをまさぐり、5本のライターを地面にばら撒いた。

「俺に聞けば持つてるに決まってるだろ。一応不良だぜ。」

桐谷は笑っている。いつもは近づきがたい桐谷も、今はとても頼りがいがある。

芳美は桐谷に、半分玩具のようなグローブを渡した。

「いらねえよ。グローブなんて付けたら突きの威力が落ちちまう。これでもガキの頃から、裸拳で拳は鍛えまくってるから、バット殴っても痛くねえからよ。」

そつ言つて桐谷は壁に思い切りパンチした。硬い壁に思い切り穴が空く。

「早く来いよ化け物共……。退屈な高校生活には最高の舞台だぜ……。」

くつくつく・・・と桐谷が歪んだ表情で笑う。皆はそれを見て、桐谷が前に学校で10人相手に1人で相手をし、ほぼ無傷で全員を病院送りにしたのを思い出した。

先ほどまで少々おちゃらけていた桐谷に、殺意が宿り始めた。完全な戦闘態勢である。

その時！激しく何かがあたる音がした。

「ハラワター！ハラワター！デテコイ、ニンゲンドモ！」

病院入り口に、血牙の群れが姿を現した。入り口はガラスなのですぐに破られるが、机や椅子、ありとあらゆるものでバリケードを作ったのでそう簡単には進入出来ない。

「かつはー！来やがったぜ爪長猿共があ！」

桐谷が大きく構えた。翔一が叫ぶ。

「みんな少し下がれ、奴ら全員が集まった瞬間、祐樹と、山瀬は火炎瓶を投げまくって足止め。

そして菅野は弓で殺せるだけ殺してくれ！進入してきた奴は俺と桐谷、安藤で倒す！」

美羽が尋ねた。

「私は！？翔一！？」

「お前は足が速い！常に状況を見て、誰かをサポートしろ！菅野に矢を渡す、祐樹達に瓶を渡すとか！火をつけるとか！」

「分かった！」

命をかけた戦いが始まった。

全員が精神を集中し、戦いに備える。

異形の化け物達は稲光に照らされ、不気味さを増す。

全員が恐怖し、畏怖していた。しかし、誰も本気で怖気づいてはいなかった。全員が、恐怖と戦いながら、自分を奮い立たせていた。

バリンと音がなり、入り口のガラスが破られる、素早く獣の一匹が侵入しようとした瞬間。火炎瓶が二本投げられた。

燃え盛る炎。そしてその一体に火が燃え移り、外に飛び出していた。激しい豪雨のため、一瞬にして火は沈静した。

「くそ！雨がなけりゃ！」

祐樹は唸る。翔一が叫んだ。

「続けて投げてくれ！そして菅野頼む！」

ヒュツと矢が放たれ、血牙の一匹を射抜いた。見事に頭を貫く。続けざま二本目も放たれ、

またも、もう一匹の頭を串刺しにする。

血牙達はたじろぎ、身構えている。芳美は構わず弓を射る。構えていた血牙の一匹は歯でそれを受け止め、

バキバキと食いちぎった。

そして、残り7匹が姿を消した。急に豪雨だけの音になる。

「逃げた・・・のか？」

祐樹が言った。しかし桐谷は目を閉じ、答えた。

「逃げるわけねえだろ……。隙を窺ってたよ……。気をつける……。」

それは的中だった。翔一達が張っていた玄関の左側に小さな窓がある。

そこを割り、一匹の血牙が進入してきた。

祐樹と山瀬が急いで火炎瓶を投げるが、間に合わず、美羽が飛びつかれる。

目の前に眼球が飛び出し、腐り果てた顔をした怪物が、美羽の首元に噛み付こうとしている。

そして続いてもう一匹が侵入。美羽が必至で血牙を突き放そうとしていると、安藤がそいつの頭にバットを振り下ろした。

「グオ！」

悲鳴をあげる血牙。そしてその頭目掛けて安藤は、ダウンスイングで思い切り頭を打ち抜いた。

スイカ割のスイカみたいに、そいつの頭は砕け、脳味噌と紫色の血液が美羽にかかった。

美羽は叫んで逃げる。翔一が抱きとめた。

二対、三対、四対が続けて入ってくる。祐樹は冷静さを取り戻し、そちらに火炎瓶をなげる。

だが、俊敏な奴らは、素早くそれを避けた。

ビシュ。二匹目の頭に矢が刺さる。そして三対目四対目が、物凄いスピードでこちらに来た。目の前には桐谷が立ちはだかる。

「どううおらあ！」

全体重を乗せた正拳突きを血牙の顔面にぶちこんだ。眼球は一撃で潰れ、顔面を押さえながら呻く。

桐谷は笑いながら弱った奴の近くに行き、思い切り、上から敵の顔面へと拳を振り下ろした。

ぐしゃりという音と共に、その「モノ」は絶命した。

四匹目は翔一が対峙していた。久しぶりの戦い。そして人間ではない相手。人間より厄介すぎる。互いに隙を窺う。

だが、先にしかけたのは翔一だった。トントン・・・という軽いリズムからトントントン！という早いテンポに変え、敵に瞬時に近づいた。立ち上がった血牙の腹に、渾身のボディブローを叩き込む。そこから、左フックを即頭部に叩き込んだ後、止めに右ストレートを顔面へと打ちこんだ。倒れこむ化け物。

翔一はすかさず相手の上へのつかり、マウントパンチで敵が動かなくなるまで殴り続けた。

10発以上殴ると動かなくなった。

皆息を切らせている。

「まだいる……。後3匹はいるはずだ……。」

翔一が紫に染まったグローブを見ながら言った。

「ウゴクナ……。」

片言の日本語が聞こえた。その方向を見ると、芳美が血牙三匹に押さえ込まれている。

翔一達が反対側に意識している間に、また入り口側から残り三匹が入ってきたのだ。

そして、その一匹が芳美を羽交い絞めにし、残り二匹が鋭い爪で芳美の喉笛を切り裂こうとしている。

「お前ら喋れるのか……。てか、菅野を傷つけたら、普通には殺さねえぞ……。」

桐谷が冷たく言い放つ。まずい、関節攻撃をしかけれるのは芳美しかない。

「ウハハハ！イイ度胸ダ。ニンゲンタチ。ココハ、ワレワレハ引くトシヨウ。オマエタチガ、タダノガキデハナクテ、コチラモオモシロイ。オヤカタサマニハ、カンタンニコロスナト、メイレイサレテイル。」

そう言って、一番デカイ血牙が芳美を解放した。

「次は、ゴジウ仲間を引き連れてクル。せいぜいワレワレを楽しませろ！それとオマエ達に一つヒントをやるう。この島二八我々に対抗する事が出来る封印師という者達がイル。濃霧が出た今、奴らも動いているハズダ。マア、何も出来んと思うガナ・・・。」

そう言つと、三匹は物凄い速さで病院を抜け出していった。

「大丈夫芳美！？」

「うん。助かった・・・。」

美羽が芳美に駆け寄った。

「菅野・・・ごめん。危ない目に合わせたな・・・。」

翔一は芳美の目を見て声をかけた。その目は昔見た翔一の優しい目だった。

「おいおい！ラブラブもいいけどよ！マジであぶねえとこだったんだから、後でやれ。あいつらのサービスで・・・てかクソ腹立つけどよ・・・。そのフウインシとか言うの探さねえと、次50じゃ、俺でも無理だ。

結構あいつらつええわ。うん。」

戦い終えて、桐谷はいつものおちゃらけに戻っていた。祐樹と山瀬は放心状態だった。

だが、山瀬はノートパソコンを立ち上げる。

「そうだ！封印師！見た事ある！見た事あるよ！その人たちが、この島で吉凶が起きたとき、納める人達だって。」

場所は分かるのか？と皆が聞く。

「帰郷谷……。一応ネットの地図に書いてあるけど、本当かどうかは……。所詮オカルトサイトだし……。」

祐樹は山瀬の肩に手を置いた。

「山瀬にかけるよ。ね、みんな？」

そこに居た全員が微笑んで頷いた。山瀬は始めて誰かと繋がった喜びに少し涙ぐんだ。

最初の戦いは、完全に負けだった。翔一達は血牙に遊ばれている。しかし、これから衝突する高校生と人を喰らいし一族の物語は、激しさを増すのだった。

命を懸けた戦い（後書き）

読み返してみると、かなり抜けている語句が目立ちました。
修正致しました。

逃げるもの。追うもの。

「帰郷谷」、山瀬がネットで見つけたその谷に、血牙の能力を封印出来る者達がいるという。

翔一、桐谷、祐樹、美羽、芳美、安藤、山瀬の七人は、激しく荒れ狂う豪雨の中、

必至でその場所を目指し、山道を歩き続けた。

奴らが次にこちらを襲撃してくるのはいつなのか分からない。少しでも早く、7人は「封印師」と呼ばれる人間達に出会わなければならなかった。

皆、互いを庇いながら、必至で道なき道を歩く。

ネットの地図で見た分では、然程遠くはなく40分も歩けば着く場所だったが、

視界を遮る霧と、雷雨のせいではなかなか進む事は出来なかった。

その時、激しい強風が吹いてきた。立っているのがやっとである。皆で声を掛け合うが、風の音にかき消される。

翔一が、林の横に小さな小屋を見つけた。皆にジェスチャーで小屋の位置を知らせる。

全員、手でサインを作ると、必至で小屋を目指した。

翔一が早く小屋に辿り着き、ドアを開けて皆を待つ。桐谷、祐樹、美羽、芳美、安藤と入るが、泥に足をとられた山瀬がこけてしまふ。立とうとするが、強風で上手く立つ事が出来ない。

その時、山瀬の後ろに絶対に来てもらっては困るものの存在に気

づいた。

血牙の一匹が走ってきているのである。

翔一は何も考えず駆け出した。このままでは山瀬が食い殺されてしまう。

風は追い風となっており、翔一のダッシュを早めた。血牙が山瀬に飛び掛った瞬間、

翔一が血牙の顔面に蹴りを入れた。間一髪、山瀬の背は鋭い爪に切り裂かれずにすんだ。

桐谷達もこちらに駆けるが、翔一は来るなと叫んだ。声は聞こえていないが、表情で分かる。

翔一と獣が寝転んでつかみ合いになる。

立ち技では、化け物相手でも、一撃死出来る技を持つ翔一も、取っ組み合いとなれば巨大な血牙一族には適わない。

ついに翔一の上に血牙がポジションを取り、そいつは目をギョロつかせながら、笑った。

拳を当てようにも血牙には届かない。そして翔一の喉笛に鋭い紫の爪が振り下ろされた。その瞬間、

「ブオオオオ！」

血牙の背中が燃え出した。山瀬が先ほどの火炎瓶を奴の背中にぶつけたのである。

苦しみもだえている敵に対し、翔一は、渾身のワンツーストレートを血牙の顔面に放った。

裸拳で撃ちぬいたそのワンツーパーチは、血牙の鼻をへし折り、尖った牙をも一撃で砕いた。

そして、大きく膝を屈め、やや右に体を反らし、拳を脇腹横へと引く。そして、化け物の顎へと躊躇なく右アッパーを放った。

獣の顎は粉々に砕かれ、そして脳震盪を起こした血牙は前のめりに倒れこむ。

翔一は、もう一本火炎瓶を山瀬から受け取り上手く火をつけてもらい、二人で少し離れ、そいつの顔面に叩き付けた。

敵の顔面が燃え上がる。血牙は動かなかった。翔一のアッパーで既に死に掛けていたのか。

翔一は山瀬と一緒に抱えあいながら、小屋へと急いだ。

これは土砂が来る。皆がそう思った。入り口で待つ桐谷が、翔一の手を握った。

「わりい……。」

翔一と山瀬は、倒れこむように小屋に入った。
なぜか一匹だけ追ってきた血牙。

小屋の扉を桐谷が閉めると、外の轟音はかなり軽減された。
皆疲弊しきっていた。

「あ……ありがとう……海野君……。」

山瀬が申し訳なさそうに話した。

「お前が死んだら、道案内がいねえだろ……。それだけだ……。」

。」

ぶっきらぼうに言い放つ翔一。

それを見た美羽と芳美は、顔を見合わせて笑っていた。安藤は二人が助かった事にほっとしている。

桐谷が言った。

「拳大丈夫か？」

空手家の桐谷ならまだしも、ボクシングしかやってこなかった翔一の拳は、グローブがあつてこそ、本領を発揮出来るもの。下手をすれば自分のパンチ力で拳が砕ける。

「あいつら大して硬くねえ。中学までスパイヤってきた奴らの体の方が硬かった。」

翔一は床を見ながらそう言った。桐谷はでかい声を出して笑った。翔一は山瀬に尋ねる。

「山瀬・・・、あとどれくらいで着く・・・。」

山瀬がノートパソコンを見た。

「普通なら１０分だけど、土砂も起こりそうだし・・・。今行っても・・・。」

美羽が喋る。

「ここで少し待とう！あいつらもすぐには追ってはこないだろう

し、今行ったら自然災害で死んじゃうかもしれない！」

皆、美羽と同じ事を考えていた。それに体は疲れ切っている。

「いいね！恋愛談義でもしながら待つか！なあ！？山瀬！」

と桐谷が山瀬の肩に手を乗せてガハハと笑った。山瀬は苦笑いをしていた。

翔一は気になっていた。なぜ一匹だけ追ってきたのか。恐らくは偵察隊だろうとは思ったが。

「とにかく、せめて風だけでも収まるまで待とうぜ……。んじや、俺寝るから……。」

そう言って翔一は本当に眠りの体勢に入っただけであつた……。

外の嵐、心の中の嵐

小屋の中は真っ暗だったが、桐谷と安藤と山瀬がライターを持ち、小さな灯りを燈していた。

ライターを持った三人は、部屋の中を照らす。すると小さな豆電球がある事に気がついた。

「山瀬、安藤、スイッチ探せ。」

桐谷が声をかけ、三人は壁沿いに歩いた。すぐに「あつた！」と安藤が喋り、淡く赤い灯りが小屋の中を照らした。

部屋の中には何も無かった。本当に何も無い。木造で古くはあるが、汚くはなかった。

灯りが点く前から、構わずに横になっていた翔一は、薄っすらと目を開けて、またその目を閉じた。

「この小屋、何に使うのかな。」

芳美が呟いた。祐樹が答える。

「普通の物置じゃない？今は、ただ使っていないだけで。」

外では、激しく風が吹く音、雨の降りしきる様子がはっきりと分かる。

桐谷は入り口の前に、もたれかかった。奴らが入ってこないようにである。

「しんみりしても仕方ねえぜ。この雨と強風。どれぐらいで治

まるかわからねえ。

何でもいいから喋ってるよ。寝ててもいいぜ。俺が見張る。」

桐谷は入り口にがつしりと背中をつけたまま、皆に喋った。立っていた他の仲間たちも、床に座り込む。

祐樹が口を開いた。

「しかし山瀬、今更だけどよく無事だったね！良かったよ……」

「

祐樹が安堵の表情を浮かべ、隣の山瀬に声をかけると、山瀬は虚ろな瞳でこう答える。

「僕は……誰も信用していない……。森君が心配してくれてるというのも本当かどうか……」

祐樹は死人の様な目つきで返答した山瀬にたじろいだ。美羽が続く。

「誰も信用してないってあんた。翔一は命賭けであんたを助けたじゃん！」

山瀬は下を向いたまま、プルプルと体が震えだした。そして両手に力を込める。

「さっき言ったじゃんか……。海野が僕を助けたのは道案内役だからだって……。ただの駒に過ぎないんだよ……。要らなくなれば君たち仲良し五人組より、僕は真っ先に捨てられる……」

安藤君もね……。」

そう言つて、山瀬は自嘲気味にくく……と笑つた。元々精神面の弱い山瀬は、心を病み始めていた。安藤がそれに反応する。

「まあ、確かに海野たち五人は、仲が良くて有名だもんな。たださ、山瀬。俺達さつき必死で戦つたじゃん。あんな怪物達と。俺も何の取り得もなくてさ、5歳から野球始めてでもセンスなくて……。だけど、小さい頃からひたすらやってきたバッティングが、野球以外で役立った時は、嬉しかった。それに今いる七人は、仲間じゃないかな……。さつきの戦いは、本当にナイスプレイだったよ。」

安藤はニコリと微笑んで山瀬に語つた。すると山瀬が急に怒鳴つた。

「安藤君は普通の学園生活を送ってきたじゃないか！僕は！僕は毎日毎日、学年中の奴らから虐められてきた！

山内！お前の友達の女子達にも僕は、臭いだの気持ち悪いだの毎日言われてきた。桐谷の友達にはトイレで死ぬほど殴られ、親からお金を持つて来いつて何回も！何回も！何回も何回も言われて！普通の生活を送つてきた安藤君や君らに、僕の気持ちが分かるわけがない！」

すると美羽が喋つた。

「友達つて……美樹とか、悠とか……？」

恐る恐る美羽が尋ねると、山瀬は美羽を睨みつけて叫んだ。

「下の名前なんて知らないよ！とにかくお前がいつも一緒に居た奴らだよ。でも・・・どうせあの馬鹿女達死んだんだろ！？ざまあみろよ！いいザマだよ！わーっはっはっはっは！」

気が触れたような表情で、山瀬は笑い出した。桐谷がデカイ声を出した。

「山瀬・・・俺にはツレなんていないぜ・・・不良、いこーる俺のツレにするな。俺にはツレなんかいないえ・・・俺には敵しいねえ。今いるお前から6人以外はな。」

桐谷は目を閉じ、腕を組んだまま答えた。そして桐谷が続けた。

「山瀬・・・お前が辛かったのは分かる。だけど、俺の事も多少知ってるだろ。学校一馬鹿だからよ。」

それに海野も誰ともツルもうとしない・・・今でも知人だからなふふ。だけど俺はよ、さつき7人で力を合わせて戦った時、仲間！って感じがした。」

山瀬は下を向いては居たが、力は抜けていた。桐谷が続ける。

「俺だつてな！好きで一人でいるわけじゃねえ！島に着いたとき森に言われたよ。こんな俺に対して、お前も友達だつて。そう言われた瞬間よー。どんだけ嬉しかったか！少なくとも俺はお前も仲間だと思ってる！駒なんかじゃねえ！全員で協力して、絶対この島脱出してやる。俺はお前から6人が脱出出来れば死んでもいい。だけどそれまでは死ねねえ！絶対守ってやるから、寂しい事言っな山瀬！友達より仲間の方が絆がつええだろ！！」

桐谷の表情は真剣だった。元々目鼻立ちも良く、美形な部類に入る桐谷の引き締まった表情は、彼の強い思いのこもった言葉を更に引き立てた。美羽と芳美は涙ぐんでいた。

「ごめんね山瀬……。私から謝るね……。美樹と悠の事……。本当に知らなくてごめんなさい。」

美羽は頭を下げていた。山瀬が申し訳なさそうな顔をし、口を開いた。

「それだけ言われても……。僕はみんなを信用は出来ない……。……。だけど……。」

山瀬は顔を上げた、緊張で顔が震えている。

「駒でもいいから、やれることを……。やるよ……。」

そう言って、少し笑った。その笑顔は、とても爽やかでそこに居た全員を和ませた。

翔一は本当は眠ってはいなかった。皆のやりとりは聞いていた。だが、一番心を開いていないのは、山瀬より翔一である。

山瀬を道案内と言ったのはもちろん嘘だし、守ったのは本能。だが、なぜ自分は生きようとするのか分からなかった。

生きていたとも思わない。ただ、血牙一族に無惨に殺されるのが嫌なだけだった。

（桐谷のヤロウ……。くせえ言葉いつてやがる……）

翔一は寝たふりをしながら、そんな事を考えていた・・・。

クラスメイト達との悲運の再会

桐谷がそつとドアを開け、外の様子を伺った。雨も小降りになつており、

風はほとんど治まっていた。

七人は、すぐに準備をすると外に出た。辺りは薄暗く、ライターの灯りしかなく視界は狭められた。

「あ、携帯！」

祐樹がそう言つと、皆、ハツと気づき携帯電話を取り出した。携帯電話のライト機能で辺りを照らす。

七人全員で照らすと、かなりの明るさになった。

先頭は翔一、一番後ろは桐谷が守りながら平坦な林道を歩き続ける。

誰も話す者等いない。ただ一刻も早く、帰郷谷という所に居るといふ封印師なる人物に出会いたかった。

しばらく歩くと、急に視界が開けた。山瀬が口を開く。

「地図だところが、帰郷谷になつてるけど……。説明によると、この先にその人物が住んでるって……。」

谷ではない。小さな滝があり、先程の豪雨で増水したのであろう濁流の流れる川がある。

飲み込まれれば一瞬で命を失う事は用意に想像できた。

川の水は、皆が歩かなければいけない所にも溢れ、慎重に歩かな

ければ足元をすくわれる。

「なんとか迂回できないかな。」

祐樹が言った。他の皆は道を探したが、ここを通っていく他無い事に気づく。

「焦るなよ。焦らなけりやなんてことはない。」

翔一がそう言って、まず一番に飛び降りた。いや、思ったより流れが強い。女連中は大丈夫かと翔一は思った。

「嫌じゃなけりや、山内と菅野、俺か、桐谷か安藤に捕まれ。女の脚力じゃスツ転んで、そのままあの川まで流れてくぞ。」

翔一は振り返らずもせずと言った。芳美は「じゃあ」と言って、次に飛び降り翔一の手を握った。

「頼むよ。海野。」

芳美はニコニコしていたが、翔一は気恥ずかしかった。

「私はこれでも脚力はこの中で多分一番だよ。だから男の助け心配なし!」

美羽が自慢のスパイクで飛び込んだ。確かにスタスタと歩いている。桐谷が叫んだ。

「馬鹿！過信するな！ゆっくり歩け！」

美羽はそう言われ、素直に慎重に歩く事にした。安藤、祐樹、山瀬、桐谷の順で飛び込む。

道は狭い、すぐ真横に濁流の川が氾濫している。もしこけでもしたら・・・。皆はそう思っていた。

そしてこんな時に、奴らが襲ってきたら・・・。全員が同じ事を考えていた。

「あ！あいつら！」

翔一が叫んだ。皆目の前を見て愕然とする。何と、旅館で逃げたはずの10人程のクラスメイト達が、集団でこちらに向って歩いてきているのである。

これは助かった。翔一は思った。仲間が多いほうがいい。今は一人でも役に立つ奴がいなければと。

しかし様子がおかしい。声をかけても向こうの反応がなく、歩き方が変なのである。

「美樹！悠！」

美羽が友達だった生徒をみつけ叫んだ。だが、全く反応がなく、左右に揺れるようにゆっくりとこちらに近づいてくる。

「お、おい！みんな！あいつら・・・腹・・・。」

目視できる所まで来て、クラスメイト達の異様さに気がついた。全員腹部に穴が空いており、内臓が取り出されている。その状態で歩けるわけがないのだ。そして腕の無いもの。首の肉がこっそりと

失われているもの。

そして何より、彼らの顔の血色は真っ青で、生きている人間の者ではなかった。

「グウグググ・・・」

「元」クラスメイト達は、野犬の様な唸り声を上げて、ゆっくりとこちらに近づいてくる。

皆気づいていた。もうクラスメイトではないという事を。

「みんな、足元気をつけろ。あいつら動きはおせえ。俺一人でなんとかなる。菅野は弓でやれるだけやってくれ。祐樹、菅野を支えてくれ。」

拳に巻いたままのバンテージの上に、翔一はグローブをはめた。

問題はフットワークが使えないという事だ。

ボクサーにとって足を使えないという事は、致命的だった。

芳美は弓を取り出し矢を付けて構える。ゆがけ（弓道で手にはめる装具）は常につけてあった。

「ごめんね・・・。」

そう言っただけのクラスメイトの心臓を貫いた。だが・・・、貫かれた者はそのまま前進してくる。

「そんな・・・馬鹿な・・・。」

翔一は前進する足を止めた。芳美が二本目の矢を放つ。またも他

の奴の心臓を貫くが、全く効いていない。
皆が動揺する中、山瀬だけが確信していた。

「あいつら多分……。痛みを感じないんだ。映画でよく出てくる化け物と一緒にだよ。どんな生き物でも脳が指令して体が動くんだから……。多分、脳を破壊すれば……。」

桐谷が笑った。

「はっは！ゾンビか！？なんであいつらがゾンビに。」

芳美が敵の頭を狙い済まし、一撃を放った。見事に命中。数秒後、その「モノ」は倒れた。

頭部を破壊……。拳でか……。きついなと弘樹は思った。

「火炎瓶は！？」

翔一が祐樹に尋ねたが、もう無いと言われる。やるしかねえ……。そう思った。

「海野。私の矢も、残り3本しかないよ！当たっても3体が限界！」

桐谷が前に出てきた。翔一に語りかける。

「二人で突破するしかねえな。いくぞ海野！」

「よし……。いくか……。」

二人がゆつくりと集団に近づいてく。芳美は残り三本の矢で見事

に三体をしとめた。

安藤が数えてみると、残り6対だった。

二人は至近距離まで近づいた。見知った顔の奴らである。こちらに噛み付こうと激しく咆哮し、威嚇してくる。

翔一と桐谷は1, 2, 3で飛び出し、足が使えない中、上半身の回転だけでパンチと突きを繰り出し、死人達を倒していく。桐谷の突きは強力で、一撃で相手の顔面を貫いた。

「なんだ！？こいつらの顔もろいぞ！」

翔一も、手打ちだけのパンチで敵の顔面を殴りまくるが、簡単に顔に拳がめり込む。腐っているのである。腐乱し、顔の骨も溶けているのだ。

勢いで、二人は次々と群れをなぎ倒していった。桐谷の拳は肉片と血でぐちゃぐちゃである。翔一のグローブも同様。二人は強かった。怪我一つなく、群れを倒して退けた。

後ろに居た5人もこの無惨な死体の場所まで来ていた。美羽はかつて友達だった美樹と悠という子の姿を見て、嘔吐した。

山瀬は、自分を虐めていた相手だったが、決して嬉しいという感情が沸いてこなかった。複雑だった。その時安藤が叫んだ。

「古賀！これ、古賀だ……。馬鹿野郎……。何死んでんだんよ。」

・・・お前のセカンド奪うために、必死で練習してきて・・・ずっと背中負い続けて・・・くそ、あの化け物達絶対許さねえ・・・」

安藤は涙を流しながら、古賀と呼んだ元クラスメイトのぐちゃぐちゃになった顔を見た。

常に自分は古賀と同じポジションで、中学からの野球仲間。そして無二の親友だった。だが、自分とは違って素晴らしい野球センスで、古賀のセカンドを自分が守る事はなかった。

安藤が古賀のズボンのポケットから何かが出ている事に気がついた。そっと手を伸ばし、それを拾い上げた。携帯電話だった。安藤はそれを開いてみる。

画面には、古賀と安藤が先頭に二人で肩を並べて写っており、後ろに他の部員二人が写っていた。

他の6人もそれを見て涙ぐんだ。安藤は声を出して泣いた。

「お前が追いつけないんじゃないやなくて、俺が追い越されないようにしてるだけだぜ！いつ安藤にポジション取られるか冷や汗もんだもん。来年の夏、最後の夏、一緒に甲子園行こうな！」

そう言っていた古賀の言葉を思い出し、安藤は男泣きした。流石の翔一も気の毒だと思った。古賀の顔を粉々に粉碎したのは翔一でもあったからだ。

美羽が安藤に近づく。

「古賀の分も、生きよう！」

安藤は涙を拭って力強く答えた。

「言われなくてもそうするさ……。」

悲しみを乗り越え、一向は封印師の元を目指す。

本当に封印師という人物は、この先にいるのか。

もしもただのネットのガセならば、7人の命は絶たれる事になる。だが血牙達が言った事が本当ならば、存在自体は真実と言う事になる。

だが一向は、彼なのか、彼女なのか分からない人物に、自分達の命を懸けるしかなかった……。

姿を現し者 封印師

変わり果てた姿のクラスメイト達と離れ、一向は目的地を目指す。氾濫する川の水に足を取られないように、ゆっくりと、ゆっくりと歩を進める。

翔一が前を指差した。

「あそこに道があるぞ。」

少し1mぐらいの高さの土壁があり、そこから道が続いているのが見えた。

皆は、慎重にそこへ向う。きつとあそこを登った所に、自分たちを助けてくれる人物が居る。

そう信じて、皆は歩んでいく。

翔一は、雨でドロドロになっている土に手をかけてひょいと登る。次に芳美。翔一が手を貸して引つ張り上げる。美羽は持ち前の運動神経で、手も使わず飛び上がった。翔一が皮肉って拍手する。美羽は無視しながら、祐樹と山瀬を手伝った。

最後に桐谷が残ったが、何せ体重が重いので大変かと思ったが、流石腕力自慢で、両手の力だけで簡単に一人で登って見せた。

後ろを振りむくと、翔一達が歩いていていた道は、もう歩けない程に深く、水流は激しさを増していた。

「行こうぜ。フウインシに会いに。」

桐谷が言った。皆黙って頷き、今度はちゃんとした道のある林道を歩いていく。

今度は先頭は桐谷が歩いていた。翔一は後ろも警戒せずに一番後部を務めた。

安藤が、「俺が後ろを見張るよ。」とバットを持ち、後ろ歩きしながら最後部を守った。

「あ？なんだこれ？」

カランカランと音が鳴った。そして桐谷は体にまとわりついたものを手に取ってみた。紐である。紐をたぐりよせると、またカランという音がする。色々な缶が茂みについており、紐に誰かがあたる音が鳴るという仕組みであつた。

「忍者みたいだね。封印師さんが張ったんじゃないか。」

祐樹が言った。その瞬間。桐谷の頬を何かが掠めた。頬を触ると血が出ている。横を見ると槍が地面に刺さっていた。

「ちよつと待て！俺たちは人間だ！」

桐谷が叫んだ。どれぐらいの時間が経ったか分からない。皆が構えていた。槍を飛ばすという時点で恐らくは人間、そして場所的には封印師だと皆信じていた。

すると三人の男達が姿を現した。それは桐谷の天敵の男たちで、翔一の事もいけ好かない奴らだった。

小林、木村、氷室……。この三人はクラスでも有名な不良で、常

に桐谷と冷戦状態にあった男達。

小林と木村はそれ程の悪党ではないが、氷室は桐谷の次に強いと言われている不良で、街のありとあらゆる不良達との繋がりもある。そして、山瀬をいつも虐めていたのもこいつら三人組だった。

「おー桐谷じゃん！お前ら生きてたのかよ！お！菅野に山内といういい女コンビもいるぜ。・・・クソ海野に、便所虫山瀬君もいるじゃん。オタクの森も。」

小林という金髪の男が言った。小林と木村は身長170程度で、ひよろつとしている。だが、氷室は桐谷と同じぐらいの体格で、いかにも番長的な風格だった。

「桐谷！俺たちはもう封印師に会ったぜ！中に居ろって言われたんだけど暇だよ。お前達も封印師に会いに来たんだろ？こつち来いや！」

小林は一人で喋り続ける。そして桐谷の腕を取ろうとした。

「お前みたいな雑魚と俺は話したくねえな。氷室、なんで封印師を知ってる？それに本当に出会ったのか？もし出会ったなら、なんで「暇」とかいう理由で外に出て来るんだよ。三人じゃ奴らに出くわせば即死だろ。」

桐谷は、鋭い目つきをした。黒髪のオールバックの少年・・・青年、氷室仁にだけ尋ねた。

氷室は顔色一つ変えず、低い声で答えた。

「お前らクズとは会話したくねえ・・・と、いいてえ所だが、状

況が状況だけに今は、手を組むとするか……。まあ、桐谷もいるしな。」

そう言つて氷室は翔一を睨み付けた。憎悪が宿っているのが分かる。翔一は氷室の顔を見て、ああ、なんかこんな奴いたなと思つた。

「おいお前……。ごちゃごちゃ言つてねえで、案内しろ。」

翔一がぶつきらばうに氷室に言つた。氷室は眉間に筋を寄せた。木村と小林が粹がつて翔一に近づいていく。氷室が怒鳴つた。

「やめろ木村、小林！海野……。俺はお前の事いつも殺してえぐれえ嫌いだけだよ……。今は同盟組もうぜ……。それからあんま挑発すんな……。こつちにや沢山武器あるんだぜ……。」

何処で手に入れたのか、氷室達はナイフや、先程の槍、鉄パイプ、凶器になる物を沢山保持していた。

翔一達は今、素手しか残されていない。桐谷が頭を下げた。

「悪い……。皆、疲れてイライラしてんだ……。今は手を組んでくれ。頼む。」

氷室はいつも絶対に頭を下げない桐谷のその姿を見て興奮した。あの桐谷圭が俺に頭を下げている。義理は守る氷室は、分かったと言つた。

「実はな。すぐそこに小さい小屋がある。俺達はそこをノックしたんだが、開けねえから扉を蹴破ろうとしたんだよ。そしたら途端扉が開いてな。若い女だった。そいつが刀で俺に切りかかってきた。俺の喉元に刀の先を当てて。「お前らみたいなゴミは血牙の餌とな

れ。」とか抜かして小屋に戻っていきやがった。で、仕方ねえからブラブラしてたんだよ。あの女半端ねえぞ。動きも刀の使い方も・・・」

女？封印師というのは女なのか？皆疑問に思った。その上、血牙一族を封印する事が目的の一族が、なぜ死に直面している自分達を助けてくれないのか・・・。皆は疑問に思った。

「私がお願いしてみる。」

芳美が言った。確かに芳美なら柔和であるし、女性なのもあるから、話ぐらいいは聞いてくれるかもしれない。全員一致で彼女にかけることにした。

「お前たちは信用ならねえ。俺たちが後ろに着く。」

小林がそう言って、小林、木村、氷室の三人組は七人の後ろに着いた。氷室が言った。

「海野・・・これは願ったりだぜ・・・いつでもお前の首を掻っ切れる・・・。」

不敵に笑う氷室。翔一は「いつでもどうぞ。」と答えた。

小林はベラベラ喋る口だけの不良、氷室は武闘派の不良。しかし木村は不良という程のものでもなかった。

ただ小林と氷室とは幼馴染で、自分も同じような事、同じような風に染まっていただけ。

そして彼は、翔一に憧れていた。

「海野・・・バンテージ、してんのか？」

木村が話しかけた。海野は木村の事も顔ぐらいしか分からなかったが、「ああ。」と答えた。

「実は、俺もさ・・・。」

木村がそう言った時、芳美が小屋から10m離れた所で銃声が鳴った。袈裟を身にまとったその人物は、長く美しい黒髪で、まだ25歳ぐらいだろうか、かなりの美人であった。

その女性が、猟銃をこちらに向けて放ったのである。

「早々に去れ。ここで私に殺されるか。血牙に殺されるか。好きなほうを選べ。」

美しい顔とは裏腹に、恐ろしい言葉を投げつける女性。芳美が頑張る。

「あ、貴女は・・・。封印師さんですか？私達は・・・。」

バン！ともう一発上空に女性が発砲した。しかし芳美は怯まずに彼女に近づいていった。

「私達は、生きなければいけません。皆生きる理由があるんです！最後の希望で私達は、貴女の元へやってきました。途中たくさんの友達が、あの生き物達に殺されました・・・。私達はお互いを励ましあい、助け合ってなんとかここまで来たんです。どうか私たちを助けてください！おねが」

今度は芳美の脇を銃弾が通り過ぎて行った。その弾は翔一に直撃しそうになったが、寸前で彼は避けた。

「あぶねえなてめえ……。」

翔一が女性に近づいていく。その時彼女が叫んだ。

「お前はどうか！少年。私は生きる気力のある者は、目をみただけで分かる。人間の瞳に宿る力というのは、お前達が思っている以上に強い。どうなのだ？答えよ！」

女性が翔一に強い口調で言った。翔一は言う。

「俺は正直死んでもいい。だけど、こいつら俺の幼馴染なんだ……。まあ、別に大した思い入れもねえよ。だけど、助けてやれるもんなら助けてやりてえ。……これが本音。」

翔一は女性に言った。女性はしばし翔一を睨み付けた後、急に笑い出した。

「なかなか正直だなお前。……いいだろ……。どうやって調べたかは知らんが、私が封印師、てらみちしどう寺道師道だ。一応女だがな。封印が解かれたのは、お前らのせいだ。それは中で詳しく話そう。全員入れ。
それから……。」

寺道は氷室の顔を見た。そして凄む。

「お前の事は全く信用していない。私に何かを話すときは全て真

実を話せ。嘘は完全に見破る。先程追いやったのもそのためだ。」

氷室は内心怒りながらも「分かったよ・・・」と言い、中に入っていた。

寺道師道・・・。やっと会えた封印師。実際に存在していた彼女に会えた一行。

これから彼らは、血牙一族よりも恐ろしい、「ヒト」という者の恐ろしさを知る。

命を捨てる必要はあるのか

封印師、寺道師道の住居は、非常に簡素だった。木造で、物が全然置かれていない。

ただ、皆が目を見張ったのは壁に綺麗にかけられている、刀や銃器の数々。

それから何かの呪いに使いそうな怪しげな道具が、壁に掛けられている。

「汚くてすまないが、座って聞いてくれ。」

美しいその女性は、男の様な語り口で皆に伝えた。

翔一がドカンと座り込み、他の仲間たちも腰を下ろす。

氷室達三人は両腕を組んだまま立っていた。

寺道が言葉を開いた。

「早速だが本題に入る。私の所まで辿り着いたからには、血牙一族との接触、濃霧による奴らの変貌も知つての事だろう。そして、神木が消滅したため、濃霧が島を覆った事も。」

芳美が「はい。」と答えた。皆、小さな声で返事をする。寺道は続ける。

「私の一族は、血牙一族、そして普通の人間達を共存させてきた。血牙達は濃霧さえ現れなければ、人間と何ら変わりなく、普通に暮らしてある。そのため私の一族は、遥か古来より神木を守り、人とあやつらの共存を存続させてきた。しかし、私が生まれる前にも封

印が解け、血牙となったあやつらが島民達を襲い始めた事がった。
その時は私の父と母が治めたのだが。」

皆、食い入るように話を聞いていた。

「神木に雷が落ちる事等絶対はない。あの木は我々一族だけが持つ呪^{じゆが}呪^{じゆが}という力で、自然の驚異や血牙一族が近づく事は出来ぬ結界を張っておる。ならば、なぜその神木に稲妻が落ちたのか・・・。」

寺道が美しく切れ長の瞳を細くし、ここにいる10人の少年少女の顔を睨み付けた。

「お前たちのせいだ！神木は、悪しき心に弱い。生きる気力の無い者。人を憎む者。あらゆる負のオーラが集まると、神木に張られた結界の力が急速に弱まる。そう、お前達が島に向ってくる直前から私には分かっていた。心の弱い者ばかりが来る。そしてまた惨事が起きると。」

翔一がにやけた。

「説教はうぜえんだよ封印師さん。要するに俺たちが腐ってるから、神木さんがぶっ壊れて、あいつらが化け物になって、それで食われるのは俺たちが悪いって事だろ？」

翔一は無表情で両手を床について寺道に言い放った。美羽は立ち上がって翔一をひっぱたきに行ったが、簡単に避けられる。「馬鹿！」と怒鳴る。寺道は表情を変えず答えた。

「その通りだ。だからお前らを助ける義理等ない。お前達が来なければ、旅館で働いていた人間、血牙、そして私も平穏に暮らして

いた。お前達若い者たちは悪しき邪念が多すぎるのだ。」

そうして寺道は、翔一、氷室の二人を指差した。そして激しく鋭い目つきでこう言う。

「特にお前達二人！座っている少年。お前には全く生きたいという信念がない！世間を憎み、誰かを殺したい程憎んでおるだろう！濃霧は邪念が強ければ強いほど、その濃さも増す。それから、そこに立っている目つきの悪い男！今までどれだけの人を傷つけてきた？お前の拳には血の色が見える。私にははっきりと見える。お前達二人は、神木の結界を弱めた張本人だ。そして、そのままの心でいれば濃霧は更に強さを増し、血牙達はもっと凶悪な力を得る。仲間を思ふなら気持ちを変えよ！でなければ、私がここでお前たちを殺す。」

殺すという言葉に、翔一と桐谷以外の8人はビクツとした。いきなり心の持ち方がどうのなの、邪念のせいで神木がだの言われてもピンと来なかったし、いきなり鬼気迫る表情で「殺す」という言葉まで出たからである。

すると翔一が立ち上がった。スタスタと寺道の前に歩み寄る。

「殺せよ。その代わり、こいつら助けてやってくれ。あんたの銃で頭ふつとばすか、その辺にかかっている刀でばつさりやってくれ。俺が死ねばあの化け物達も弱くなるんだろ？じゃあ殺してくれ。」

翔一の目は真剣だった。真っ直ぐに寺道の目を見て、全く怖気づいていない。

寺道と翔一はしばし、視線をぶつけ合った。そして寺道は無言で、近くにあった真剣を手に取り、鞘から切れ味の鋭そうな刀を抜いた。

「いいだろう。お前の仲間が私が責任を持って島から逃がしてやる。生きる気力の無い者等、私は命を懸けてまで、守る気はないからな。」

そうして寺道は、刀を斜めに構えた。咄嗟に、芳美と美羽、桐谷、安藤、祐樹の五人が駆け寄った。山瀬は恐怖で腰が抜けていたようだ。

桐谷は両手を大きく広げ、寺道の前に立ちはだかった。芳美と美羽は、背中で翔一を庇うように、安藤と祐樹も桐谷の横に並んだ。

「どけよお前ら。くさい事やってんじゃねえよ。俺が死ねばいいんだからよ。」

翔一が言ったその瞬間、彼は顔面に激しい衝撃を受けた。桐谷が翔一を殴りつけたのである。そしてそのまま翔一に馬乗りになり、更に一発殴った。

「いい加減にしろ海野！これを見てもわかんねえのか！ああ！？お前はどうか知らねえ！知人？上等じゃねえか。知人上等だ！ただな、ポン刀持つてる奴に菅野と山内の女二人がお前を庇ったんだぞ？オタクの森に、ほとんど喋った事も無かった安藤も！それに対して・・・それに対してお前のその言葉はなんだ！！ああ！！」

そういつて桐谷は翔一の右の頬と左の頬を殴りつけた。皆が動けずに居た。そうして、桐谷は涙を流す。

「死ぬ・・・なんて言うんじゃないよ・・・俺が死ねばなんて簡単に言うんじゃないよ・・・お前は生きたくないかもしれない・・・俺も別に死んでもいいと思ってた・・・ただどな、俺は思う。お前も・・・そして全員でこの島を出たいって。俺は自分を犠牲にするのは最後の手段だと思い始めてきた。それは今までのお前の頑張りを見てきたからだ。生きる！俺たちと一緒に島を出ろ！」

そうして桐谷は翔一の襟を掴んで立ち上がらせた。

「いつまでも腐るのはお互いやめにしようぜ。それにお前の拳が無いとこの先どうなるかわからねえ。な？戦力が減る！その理由じや駄目か？」

桐谷が翔一に詰め寄る。翔一は桐谷と目を合わさなかったが、翔一は思った。桐谷はもしかしたら庇うかもしれないと思ったが、まさか菅野と山内まで・・・。

びびりだった祐樹。そしてほとんど会話した事もない安藤までが体を張って・・・。

そして翔一は覚悟を決めて、寺道に口を開いた。

「分かったよ・・・封印師さん。やれるかわかんねえけど、心入れ替えるように頑張るから、殺すのやめてくれねえかな・・・自分から言っておいてわりいんだけど・・・。」

翔一は寺道の方を見て、そう言った。寺道は素早く刀を鞘に納めた。

「ふふ・・・若い者というのは、純粹な思いやりがある反面。大人になり切れてない分、邪念も強いが・・・お前たちの絆の強さははつきりと見せてもらった。海野という少年。こんなに良い友

達がいるのだから、心を入れ替えよ。さすればお前は、心技体全て揃う男なる。私が保証しよう。人を見る目はある。」

そう言つて寺道は微笑んだ。初めて本当に心から浮かべた笑みは、男性陣をドキリとさせる美しさだった。

美羽は「本当に心入れ替える！」と翔一の肩に本気でパンチをし、安藤と祐樹は何も言わず笑つて翔一の腹に軽く拳を当てた。山瀬はほつとしていた。自分は動けなかった事に情けなさを感じていたが、桐谷は翔一に拳を差し出した。上からそれを軽く叩く。

そして芳美が翔一に言った。

「私達の事、守つてよ。昔言つてくれたじゃん。美羽と私の事・・。」

そう言つて芳美が翔一にもたれかかつて泣いていた。

翔一はどうしていいか分からなかったが、芳美の肩を両手で優しく押さえて、こう言った。

「そうだったな・・・。わかった。」

何年ぶりかの翔一の笑顔だった。皆がそれを微笑ましく見ている時、

それは起きた。

「テラミチ・・・。ガキドモモオルノ！」

小屋の外から聞こえてきた低くシャガレた大声。そして唸り声が聞こえてくる。

小屋の外には、血牙一族が集結していた。

命を捨てる必要はあるのか（後書き）

仲間っていいですね。

血霧丸

そこに居た全員が身構えた。寺道は先程翔一に向けた刀を手に取り、そして左手の手首にかけてあつた大きな数珠を手に持ち、扉の前に立った。

「扉から出るな。私が良いと言ふまでは。」

振り返らずにそう、一言告げると、寺道は外に出た。完全な霧が辺りを覆っており、一寸先も見えない。しかし、唸り声と汚臭、そして無数の殺意が向けられている事がはつきりと伝わってくる。

「この群れを率いている者の長よ。お前は血牙一族の長ではないな。」

寺道は目を閉じて、心眼で辺りを見回す。

封印師、寺道師道の能力「心眼」は神経を極限まで研ぎ澄ます事で、視覚に頼る事なく、周囲のものをを見ることが出来るという能力であつた。

「ふふ・・・長はまだ本気ではない。お前如きとヒトのガキ数人相手にあの方が来るわけがなかつ・・・。」

人間と変わらない声質、口調で喋る者がいる。だが、寺道ですらやや押される程の威圧感を感じる。

「いいだろう。こちらは子供だらけだが、お前以外ならばまとも
に戦えそうだ！」

寺道はそう言って、刀に数珠をかけた。そしてそれを両手で上空
へ向け、大声で叫んだ。

「視界を妨げし濃霧よ！神刀・血霧丸けつむまるの名に於いて命ずる！滅せ
よ！」

寺道が叫んだ瞬間。眩しい光が血牙一族を照らす。上空に小さな
太陽の様なものが現れ激しく輝き、
辺り一面の霧が消え去った。そしてその上空の光は、血牙一族を苦
しめる。

「血霧丸……。忌々しい刀よ。それさえなければお前も、お前
の両親も一族も！我が先祖が根絶やしにしてくれていたのに……。

」

姿を現したのは体長3mはあるであろう。他の血牙とは違う生き
物だった。熊よりも大きく、肌の色は紫色で、体中にイボが生えて
いる。両腕に鋭い棘が生え、四本の腕に50cm程度の金属の様な
爪。

そして眼球は顔の半分を覆う様な大きさと、黒目がぎよろぎよろ
と動いている。頭には薄い毛が生えていた。

「お前さえ殺してしまえばガキ共もすぐに餌になるのだ……」

群れのボスが、寺道に飛び掛る。涼しい顔で寺道は避け、刀を顔
の前に持ち構えた。

そして奴が、上空から飛び掛る。寺道は「馬鹿が……」と言い、自分に飛び込んでくる敵に刀を突いた。はずだった……。

「ザンネン、ザンネン。」

「ムガサマ、ドウゾ。」

雑魚二匹が、寺道を押さえつけたのである。

ムガと呼ばれたこの群れの長の血牙は、寺道の首を爪で締めていた。少し力を入れれば、簡単に突き破られ、たちまち出血し、死ぬ事になるだろう。

「はっはっは！もう上空の光はないぞ！お前としたことがな……」

他の雑魚達も完全に力を取り戻していた。霧だけは薄いままだが。

「終わりだ……」

ムガが爪に力を込めようとした瞬間。ムガの後頭部に激痛が走った。

「ぐわ！」

触つてみると矢が刺さっている。そして次の瞬間、二匹の血牙は吹き飛ばされた。翔一と桐谷が殴り飛ばしたのである。そこへ斧を持った祐樹が止めを刺しに行く。もう一匹は安藤がバットで頭を粉々に砕いた。

「貴様ら！人間のガキ風情が！」

ムガは立ち上がって芳美に突進した。その右目を、また芳美の矢が貫いた。

芳美の矢は、寺道の部屋にあったもので、弓に合うサイズだった。

「いてええ！てめえら！食い殺せ！容赦するんじゃないぞ！」

他の血牙一族が咆哮した。一斉にこちらに襲いかかってくる。ムガは翔一達に向っていった。小屋の入り口に立っている芳美に6体の血牙が襲い掛かる。避けようがない。

しかし飛び掛っていく血牙の顔面や腹を重い衝撃をあたえ、失神させる男が立ちふさがった。翔一で・・・はない。氷室の仲間、木村である。

「菅野・・・お前と話した事ねえけど、今話す。俺もボクシングやってんだ。海野に憧れてさ。前は任せる！後ろから弓矢でやりまくってくれ！」

入り口からちよつと前に出た木村。木村真二は、翔一のボクシングの試合を観て、中学時代からプロボクシングジムで練習をしている。もうライセンスを取れる力もある。

ただ性格は弱気な方で流されやすい。

だが、血牙三匹を相手にしても全く怯まない木村。本番に強いタイプ・・・命を懸けた本番に。

「早く来いよ……。人間なんて怖くないんだろ？」

そう行つて素早く木村は飛び込み、残りの三匹もあつという間に殴り倒してしまう。

俊敏な動作で爪を振るう血牙達を、軽いフットワークで避けていた。

その時、小屋の中では氷室と小林が切れていた。

「木村の野郎……。何かっこつけてんだよ。死ねよカス。」

小林が粹がる。小林を睨んで、氷室は腕を組んで言った。

「……。俺もやる。お前あの女の台詞忘れたか？また霧が濃くなんぞ。今は海野の首も桐谷もどうでもいい。

とりあえずやるしかねえだろ……。」

戦闘モードに入つた氷室の顔は凄まじかった。今まで数え切れないほどの不良達を相手にし、桐谷以外には負けた事がない氷室仁。決意した表情は、恐ろしくもあり、勇ましくもあった。

小林は、ただ小屋でびびっていた。「お、俺は出ていかねえ……。」

だが、そんな負の心が霧を更に強くするのである。

そしてもう一人、山瀬も怯えていた。元々山瀬はこういう性格なのである。芳美の立っている隙間から見える外の光景を見て、もう顔を埋めて震えていた。

美羽は、大量の矢を芳美の所まで運んで、矢を渡す係りをしていた。美羽は役に立てなくてごめんねと芳美に言つたが、芳美は「う

んっん！ありがとう！」と答えた。

「やべえ……いてえな……。」

木村は裸拳で血牙達を何十発も殴ってしまったので、拳を痛めた。そこに氷室が来る。

「氷室さん……。」

氷室は木村の顔を見て、

「たく……。ボクシングかなんか知らねえけど、殴りなれてない奴が無理すんじゃないよ……。」

と言って肩を叩いて前線に出て行った。そのやりとりを見ていた芳美が、「あ！」と気づき、

「これ、ばんてーじって言うのと、安物だけどグローブ。使えるかな。」

木村はそれを見て、

「ありがたい！でも、巻いてる暇ないからグローブだけでいいや！」と言って手にはめた。

またら対が襲い掛かってくる。木村は構えた。

前線では翔一と桐谷、そして血霧丸を手にした寺道が、凄まじい勢いで敵をなぎ倒していた。

そして翔一と桐谷が失神させた血牙に安藤と祐樹が止めを刺す。

問題はムガである。雑魚を相手にしなければいけない上に、右目が見えないとは言え、臭覚で場所が分かっってしまうムガには、無意味であった。

寺道がムガに斬りかかった時、巨大な爪で刀が弾き飛ばされた。弧を描いて他の血牙がキャッチする。

「走れ！それさえなければ俺達の勝ちだ！」

ムガは大きく笑った。血霧丸を手にした血牙はそれを口で咥え四足で走り出す。とてもじゃないが追いつけない。

「まずい！誰か止めてくれ！」

大声で寺道が叫ぶ。翔一が咄嗟に走り出した。邪魔する化け物達は拳でなぎ倒していく。

全力で走る。今まで生きてきた中で、此れほど本気で走った事があるか。しかし、ぐんぐん離されていく。

「くそおおおお！！！」

必死で走っても追いつけない。その時、自分の横をあつという間に走りぬけた女がいた。

美羽だった。手には槍を持っている。凄まじい速さで、犬や猫のよるうな速さの血牙に追いついていく。

それに気づいた逃げる血牙は更にスピードを上げた。しかし、美羽が追いつき、持っていた槍をそいつの体に突き刺した。

「グオオ！」

勢い余って美羽も転んでしまう。翔一は先に弱っている血牙を殴り殺し、刀を取り返した。

「山内！大丈夫か！」

駆け寄る翔一に美羽が怒鳴った。「いいから早く！寺道さんにその刀を！」

翔一は頷くと、全力で戻っていった。

美羽は血牙に刺した槍を引き抜くと、独り言を呟いた。

「それでもインターハイの短距離、中距離優勝者なんだから。」

流石に疲れたみたいで、美羽は軽めに走りながら戦場へと戻っていった。

血霧丸（後書き）

読者の方に、一人でも気に入ってもらえるキャラが出来れば、幸いです。

命を懸け友を守った者

翔一が前線へと駆ける。200m以上は走った上、血霧丸を持っているので速くは走れない。

「くそ！いそがねえと！」

全力で彼は走る。「神の刀」と呼ばれる物を、やっと、「仲間」と認めた者達の元へと・・・。

前線では、ムガが猛威を奮っていた。巨大な腕を振り回し、そしてその腕に無数に付いている金属の様な棘。

桐谷、安藤、祐樹は他の血牙を相手にするのに必死で、寺道とムガが一騎打ちをしていた。

しかしあまりに分が悪い。寺道は武術の達人でもあるが、ムガの鋭い爪や腕の棘で切り裂かれれば、一撃で致命傷を負うことは間違いなかった。

「楽しいゾ！寺道！お前をいたぶりながら殺すのは！ぴょんぴょん跳ね回っていつまでもつか。ぐははは！」

ムガは楽しみながら寺道に凶器の爪を奮う。寺道は翔一が血霧丸を取り戻してくれるのを信じ、紙一重でムガの攻撃をかわしていた。

（少年・・・頑張れ・・・）

翔一が必死で血霧丸を持ち、走ってくる姿が寺道の心眼には見えていた。相当に重い血霧丸を持つてくるには、

かなりの時間がかかる。あの刀は長く、そして特殊な物質で出来ており、普通の刀より遥かに重い。寺道だからこそ扱える「神刀」であった。

「来いよおら！」

桐谷は血牙の群れを次々と華麗な蹴り技でなぎ倒して行く。安藤は飛び掛ってくる血牙にためらいなくバットでフルスイングし、頭を粉々に砕いていく。祐樹は桐谷が倒した雑魚に、斧を振り下ろし止めを刺し続けていた。

「ぐわあ！！」

声を聞いて、桐谷と安藤が振り返る。祐樹が止めをさせなつた血牙に腕を爪で引き裂かれた。大量の出血。

腕を押さえても流れ落ちる鮮血。凄まじいスピードで安藤が近づき、バットでそいつの頭蓋骨を砕いた。

桐谷が安藤と顔を合わせた。

「安藤！小屋まで森を！」

「だけど桐谷！お前でもあれだけの数は無理だろ！」

桐谷は考えた。まだ半数・・・20以上の雑魚がいる。そしてここを離れれば、寺道は雑魚に囲まれ、ムガによって殺される。だから、自分がやるしかなかった。

「行け！安藤。頼む！」

安藤は躊躇したが、「絶対死ぬな！」と言うと祐樹に肩を貸して

小屋へと駆けた。
祐樹は呻く。

「いてえ！いてえええええよ！いてえよ！」

「森！しっかりしろ！大丈夫だ！大丈夫だから！なんとか歩け！」

そして、桐谷の目の前に10体の血牙が群れを成す。桐谷は覚悟した。

「かかってこいやああああ！」

群れが桐谷一人に飛び掛る。空手の達人の桐谷も、血牙の群れの攻撃には耐えられない。

次々と襲い掛かる群れ達。巨大な爪で顔を引き裂かれる。腕に大傷を負い、気を失いそうな痛みにも耐えながらも桐谷は倒れない。10体相手に三匹まで倒した。

「ヒトノガキニシテハヤル」

「グヘ・グヘ」

他の血牙達が敵ながら賞賛していた。しかし容赦なく桐谷に襲い掛かる。顔に爪を振り下ろされ、両目を惨たらしく切り裂かれた。視界を失った桐谷を奴らは容赦なく襲い掛かった。両腕を食いちぎられ、腹を爪で大きく引き裂かれる。そしてその内臓へと群れ達は「食事」を開始した。終わった。桐谷は激痛から大量の出血で意識が薄れ、痛みも感じなくなっていた。

「グヘエ！」

「ブフ！」

誰かが来たのが分かる。しかし、瞳を切り裂かれ視力を失った桐谷には何がなんなのか分からない。

「お前ら俺の獲物に手え．．．出してんじゃねえ．．．！」

氷室だ．．．。桐谷は声で分かった。氷室が助けに．．．来てくれたのか．．．。後は頼む．．．。俺を友達だと言ってくれたあいつらを．．．。お前はつええからよ．．．。

氷室は桐谷の無惨な姿にされ、力尽きた姿を見て、激高していた。

「くそがああああ！」

氷室は強かった。ありとあらゆる不良、チンピラ、そしてヤクザかぶれとも殺し合いの喧嘩をしてきた。

だが、どうしても桐谷だけには適わなかった。ある因縁もあった。決着も果せず、いや自分の中で決着は着いてなかった。その桐谷の命を奪った血牙に対し、氷室は狂気とも言えるほどの感情を抱いた。

ものすごい腕力で血牙達を投げ飛ばし、得意の喧嘩技で戦っている。まさに不良漫画の番長と言える様な強さ。それを血牙一族相手に奮っていた。

そして残りの10匹も氷室の前に立ちふさがる。氷室は桐谷の事切れた姿を見て、震えた。

「人間ならまだしも……こんなクソ共に殺られやがって……
決着もつけてねえのに……。」

氷室は全身に力を込めて叫んだ。

「さつさときやがれクソ共！くせえんだよ！まとめてぶつ殺してやる！」

その時、後ろから誰かが駆けてくる音がした。氷室は振り返らない。走る音で分かる。

「氷室さん……はあ……はあ……。桐谷！桐谷！嘘だろ！
おい！桐谷！うわあああああ！」

小屋前の雑魚を芳美と殲滅し、前線に駆けつけた木村だった。桐谷の無惨すぎる死体に、木村は我を失った。

そして弓を持った芳美が来た。その信じられない程の凄惨な光景に。芳美は膝から崩れ落ちた。

声も出せず、瞳から、あっという間に大粒の涙が溢れ出す。氷室が叫んだ。

「泣くな菅野……。悲しむ暇があったら、こいつらぶち殺して
弔い合戦だ……。いくぞ……。木村……。」

氷室は真っ直ぐ群れ見てそう言った。木村はその氷室の顔を見る。氷室の目元に若干……。若干だが、薄い雫があるのが分かった。

「氷室さん。俺マジ切れしました。何も怖くないっすわ。」

氷室は笑った。

「あたりめえだろ……。小林みてえな弱い者いじめのくつつきパシリとはお前はちげえ……。」

二人は群れに向っていく。木村のスピードは凄まじい。やはり血牙の攻撃を意図も簡単にかわし、そして全力の拳を奮っていく。ジムでもここまで切れたことはなかった。氷室も得意の力技で、ことごとく倒していく。

芳美は二人が戦っている姿を見て、立ち上がった。涙を拭う事もなく、桐谷の遺体を見て、そして血牙達に矢を放った。いつもよりも更に速く跳んだ矢は、見事な程に相手の脳天を貫いていた。

「寺道さん！」

「構わずそのまま私に投げつけてくれ！思い切り投げろ！」

翔一が重すぎる血霧丸をやっと持ってきた。迷うことなく両手で寺道に放り投げた。

クルクルと回転して刀は寺道の方へ飛んでくる。素早く走り、躊躇い無く見事にキャッチした。

大怪我をしている祐樹、命を懸けて仲間を助けた桐谷。二人の姿はムガの猛攻を避けながらも分かっていたが、

助けてやる事が出来なかった。寺道の美しい顔が、憎悪の帯びた恐ろしい表情に変わる。

「ムガ……。貴様はただでは死なせん……。神刀の前に切り刻ま

れよ・・・」

持ち主の手に戻った血霧丸。大きな犠牲を払った戦いに、終止符が打たれようとしていた。

因果

寺道が目にも止まらぬ速さで、ムガの懷に飛び込んだ。そして血霧丸を心臓目掛けて突き刺した。

女性とは思えない物凄い力で、ムガの心臓の位置を正確無比に貫き通し、一気に引き抜く。赤い液体が、物凄勢いで放出され、ムガは絶叫した。しかし、血を流しながらも寺道に攻撃を仕掛けてくる。

「なぜ・・・倒れぬ・・・。」

寺道は確実にムガの心臓を貫いた。そして大量の出血を浴び、自分も返り血で袈裟が真っ赤に染まっている。

しかし、全く動きの止まらないムガに対し、寺道は疑念を抱いた。

「いてえぞ寺道・・・。だが・・・オレは死なんぞ・・・グハハ！」

そういつとムガは全身に力を入れ、「グオオオオ！」と叫んだ。その咆哮は、その場にいる者達の鼓膜を痛めつけた。そして貫かれた穴がたちまちに塞がって行く。そしてムガは大きく笑った。

「俺は不死身だ！親方様以外に、俺を死滅させる奴なんてイネエ！」

そうして寺道に襲いかかってくる。寺道は冷静だった。不死身な者等おらぬ・・・。

形あるもの、必ず崩れ、終わりがある。そう思い、飛び掛ってきたムガの右腕を凄まじい速さの斬撃で切り落とし、苦しんでいるムガの左腕も容赦なく叩き斬る。そして宙に軽やかに舞い、回転しながら

らムガの首を、横一文字に切り落とした。

首だけになってもムガは生きている。寺道はそれに近づいていった。凍りつくような視線を送りながら。

「ククク・・・やるな寺道・・・。流石は我が一族の敵だ。だが、所詮俺等、親方様の駒の一つに過ぎん。

そのガキ達と、お前だけで、我が主に適うわけがない。」

寺道はなんの躊躇いもなく、ムガの首に刀を突き刺した。そして念じる。

「封霧・・・滅牙！」

ムガの頭部から眩い光が放たれ、粉々に砕け散った。群れの長「ムガ」は今度こそ、絶命した。

「すまぬ！」

寺道は、一言だけ翔一に言うと、氷室と木村の元へと駆けた。そして残りの血牙達を「一閃」していった。

まさに「神速」。あっという間に血牙の雑魚の首だらけになった。

氷室と木村も軽い傷は負っていたが、完全に疲弊しきっていた。

寺道の真っ赤に染まった全身と、赤一色に染まった刀身を見て、二人は終わったんだと確信した。そして犠牲となった桐谷の遺体へと皆向う。

翔一は、ただ寺道とムガの戦いを見ていて、桐谷の遺体には気づいていなかった。

寺道達がこちらに歩いてくる。

そして、誰かが倒れている所に立つ。芳美も。そして翔一もそこに近づいた。

「き・・・桐・・・谷・・・。」

翔一は今日の前にある現実が全く受け入れられなかった。俺がもっと強ければ・・・、もっと速く刀を封印師に渡していれば・・・。自分を責め続ける。言葉が出ない。だが、気づくと自分の視界が霞んできたのが分かった。

「泣いてんじゃねえぞ海野・・・。だせえ野郎だな・・・。男の癖によ・・・。」

氷室が強がって翔一に言った。人が死んだ。最初病院に行くまでに奴らに襲われたクラスメイト、谷で遭遇した元クラスメイトの死人達。それを見ても何も感じなかったのに、翔一の涙は止まらない。

安藤と美羽も走ってきてた。二人は一時硬直し、安藤が叫んだ。

「死ぬなって言ったのに！桐谷！うわー！」

安藤は泣き叫びながら、先程捨てたバッドを拾い、地面を何度も何度もたたき付けた。

美羽がそれを止めた。後ろから涙を流しながら安藤を抱きしめた。

「俺が・・・俺がいれば・・・助けられたかもしれないのに・・・また・・・友達を・・・。」

安藤は嗚咽して言葉にならない。そこにいた誰しもが、安藤の姿を見て、涙を堪えた。

そんな中、芳美が桐谷の惨たらしい遺体に近づいて行って、しゃがみ込んで話しかけた。

「私の事可愛いなって言うてくれた事あったね。付き合ってくれて。返事・・・出来なくて・・・ごめんね・・・。」

芳美は肩を震わせて小さく泣いていた。

その時、ドタドタと小林が走ってきた。周囲の状況を見て、戦いが終わった事を知る。安堵した後、桐谷の姿を見てこう言った。

「おお！流石氷室さん！だつは！桐谷！ざまあねえな。どうせ氷室さんに首取られる所だったんだ！良かったすね氷室さ」

小林が腐った台詞を言い切ろうとした時、顔面の頬骨が碎ける感触がした。そして肋骨の骨が砕け、内臓が破裂するような感触。翔一が瞬時に小林に無数の拳を撃ちつけていた。

「かつは！くつそ・・・てめ・・・海野・・・てめ・・・殺す・・・ぞ・・・。」

翔一の顔は冷酷だった。全員がその表情を見て寒気を感じたが、皆が翔一と同じ気持ちであった。

「殺してみる。軽くしか殴ってねえ。折れてねえし、中身もイッてねえはずだ。死にたいなら来い。お前はあの化け物達より腐ってる。」

翔一はそう言って、小林が立つのを待った。せえせえ言いながら立ち上がる。そして、

「氷室さん！もうこいつやっちゃいましょうよ！木村も！」

氷室と木村はニコニコしながら小林に近づいて来た。小林がニヤリとして翔一を見つめた瞬間。

小林は氷室に肩を？まれた。

「ふう……。クズが……。」

小林の腹に思い切りパンチを打ち、顔面に膝蹴りを打ち続ける。木村は逃げようとする小林を押さえつける。

「ぶつ！やめ！……ひむ……。」

このまま続けると死ぬという時に、翔一が氷室の肩に手を置いた。物凄い目つきで翔一を睨みつける氷室。

「そんな奴。殺す価値もねえだろ。」

氷室は一瞬考え、答える。そして失神している小林の体を放した。

「そうだな……。お前と同じだな……。いや、お前の首は必ず獲るけどな……。」

氷室はそう言って翔一と睨み合った。木村は倒れている小林に声をかける。

「小林。お前一人で行動しろ。度胸もないくせに口だけは達者。

山瀬みたいな弱い奴いじめしか出来なくて不良って、ダサすぎだし。」

しばしの静寂の中、安藤が言った。

「くそ・・・泣いていられねえ。森も大怪我してんだ。一応俺と山瀬で、小屋にあったもんで応急処置はしておいたんだけど、寺道さんみてもらえないですか？」

「もちろんだ。皆、すまない・・・。全員の状況は分かっている。ただ、私の力不足だ・・・。

此れほどまでに正義感に溢れた男を死なせてしまった。だが、彼は、本当にお前たちに好かれていたんだ。信じてはもらえぬかもしれぬが、人は死んだら終わりではない。「魂」というモノがあり、それは永遠に生き続け、やがて生まれ変わる。そして他の生命として生まれ変わるまでは、親しい者達を守り続ける。私には桐谷君の魂が見えている。とても淡く、優しい光を放っておるよ。ずっと我々の周りをゆつくりと飛び廻っているよ。」

皆は周りを見渡したが、もちろん何も見えなかった。だが、寺道の言う事が本当であると、全員が信じていた。いや、信じたかった。

皆が桐谷に別れを告げた。最後に翔一と氷室が残る。氷室が口を開いた。

「俺と桐谷は因縁があつたんだ・・・。だが、お前とつるみだして、段々と丸くなっていきやがってよ・・・。不良じゃねえ桐谷なんてやろつにもやる気になれなくてな・・・。不良じゃねえ桐谷なんて

桐谷じゃねえ……。だが……。死ぬ直前のこいつはマジで、イケてた……。」

そう言つて氷室は小屋へと向つた。そして翔一が周りを見渡しなが声を出す。

「聞こえるか。桐谷。お前、全員で脱出するつて言つたよな……。お前を助ける事は出来なかつた。だけど、今度は俺が、お前の代わりになる。約束する。寺道さんの小屋でもらつたお前のパンチ、効いたぜ……。」

そして翔一も小屋へと歩き出した。その姿を一匹の小さな血牙が見ていた。偵察の者である。

そして親方様と呼ばれる者の元へと走り去つて入つた。

因果（後書き）

知り合いに「もう終わりそう。」言われたのですが、そんなに早くは終わりません。しかし、グダグダと続けようとも思っていないので、これからよろしくお願いします。

芽生える友情 親方様

皆が小屋に戻ると、寺道が祐樹の腕の傷を手当してた。かなりの出血ではあったが、大事には至らなかったようである。寺道曰く「秘伝」と言われる薬草を塗ると、祐樹の傷の痛みと、出血は、次第に治まっていった。

祐樹の怪我を知らなかった者達は、彼に駆け寄って声をかける。しかし、痛みが和らいだ祐樹は、笑顔で答えた。

「大丈夫！みんなありがとう。あれ？桐谷はまだ？」

桐谷以外の全員が小屋の中にいる。皆返り血や怪我での出血で、酷い有様だが、祐樹の台詞を聞いて、表情は皆が固くなった。

「桐谷は死んだ。けっ！」

小林が憎たらしい顔で言い放った。全員が小林を睨み付けるが、開き直っている金髪の不良には、誰も手を出そうとも思わなかった。

「死んだ？桐谷が？なんで？お・・・俺が、怪我したから・・・俺がどんくさくて、安藤に助けてもらって、戦力削いだから！桐谷は！？桐谷の遺体は！？」

祐樹は無理して立ち上がり、外に飛び出そうとした。しかしその前に翔一が立ちはだかった。

「見なくていい。桐谷は、死んでない。」

「いや、だつて！」

「大丈夫だ！今も俺たちの周りをぐるぐる回ってるさ。」

翔一は祐樹にそう諭し、寺道の方を見た。彼女はゆっくりと深く頷いた。途端、祐樹の目からは涙が溢れ、顔はぐしゃぐしゃとなった。声にならない嗚咽が漏れる。

美羽が駆け寄って、祐樹の手を握った。

「桐谷言つてたよね。俺は死んでも、お前達が生き残ればいいって。言葉通り、男らしくあいつは死んでいった。祐樹は悪くなんかない。私たちがあいつに対して出来る事は、全員生きて島を出ること。」

そう言いながら、涙をぐっと堪える美羽。その言葉に対し、祐樹はさらに涙が止まらなくなった。

そして寺道が声をかける。

「冷たくてすまないが、ゆっくりしている時間はない。奴らの長とその右腕達、一族全部での襲撃があれば、

今の我々に勝ち目はない。奥の部屋に風呂がある。今、沸かすから一度血を洗い流し、疲れも取りなさい。

血牙の血が、人間の血液に混じった場合、奴らの仲間と化す場合がある。祐樹君は爪で裂かれたときの傷であるから大丈夫だとは思うが、皆、早目に風呂に入ってくれ。浴槽は広い。女性二人は私と、男性人は狭いが、

祐樹君以外は一緒に入ってくれ。それから大事な話がある。」

そう言つて寺道は小屋の奥へと向つていった。皆、ガスがあるの

かと思っていた。

「小林、山瀬は入らなくていいな……。せめえなら邪魔だ……。何もしてねえしな……。」

氷室は両腕を組んで、目をつぶり、壁にもたれ掛かりながら喋る。山瀬はビクリとした。

「す……。すみません……。」

山瀬がおどしながから口を開く。氷室が続けた。

「別にお前みたいな便所虫に期待なんかしてねえよ……。ただどな……。男ならやる時はやれ……。桐谷の戦い見てきたんだろうが……。次、びびってたら……。俺がお前を殺してやる……。」

「

氷室は、静かに、そして冷酷な言葉を山瀬に投げつけた。山瀬は更におどおどとした。

翔一が氷室の前に立って、もういいだろ、と言った。氷室は黙って眠ったふりをする。

「海野。」

不意に氷室が口を開いた。そして目を閉じたまま語りだした。

「俺と桐谷は。お坊ちゃんの家で育ったんだよ。所謂ボンボンだ……。あいつの親は、父親が弁護士、母親は税理士だ。ガキの頃から勉強勉強で、育てられたらしい。文武両道とかいうものを掲げていたあいつの父親は、3歳から空手をあいつに習わせた。そし

て中学二年の時、ついに切れた桐谷は、父親を病院送りにし、俺と同じ不良街道まっしぐらよ……。奴の強さは異常だった……。腕つぶしだけじゃねえ……。完全に切れてやがった……。」

翔一だけじゃなく、そこにいる全員がその話に聞き入る。

「俺も似たようなもんだ……。まあ、俺は小学校時に、家に火を点けたから、デビューは俺の方が早いけどな……。俺は格闘技や武道に興味なんかなかったし、腕つぶしだけでのし上がってきた。で、あいつがこの辺で最強だつて聞いたとき、俺は奴とタイマン張った……。ざまあねえ……。余裕でのされた。それまで負けたことの無かった俺がな……。」

するといきなり氷室は壁に向つて、思い切りパンチを打ち込んだ。

「俺はそんな時あいつと約束した！今の俺じゃ適わねえ……。だが、何かをやればお前には勝てる！だから、高校卒業までに俺ともう一回やれてな！あいつは、待ってるぜと言つてた……。待ってる……。待つてると……。もうやれねえじゃねえかクソがある！」

壁を何度も叩きつける氷室。拳から血が流れ出す。瞬時に木村が氷室の右腕を掴んだ。

「やめてください氷室さん。貴方が勝ち負けは、もうどうでも良い事は分かっています。今は、桐谷に代わつて貴方の力が必要なんです。寺道さんが言つてた事が本当なら、氷室さんに桐谷の力が宿るかもしれない。俺は、そんな気がするんです。」

木村は見た目の華奢さからは想像がつかない程の腕力で、氷室の

右腕を押さえる。木村は表情を変えない。
先に氷室が折れた。

「海野……。桐谷が死んだ今、俺が齒が立たなかった桐谷が唯一認めた男、お前の首は必ず頂く……。島を出てから覚悟しとけ……。それまで絶対死ぬんじゃないぞ……。」

そう言うのと木村の手を振りほどき、また壁にもたれた。
そうして、寺道が顔を出した。

「沸いたぞ。女性二人。さっさと入ってしまおう。男性人は決して覗かない様に。私はともかく、若い女性なのだからな。」

芳美と美羽が奥の部屋に入っていた。

「覗いた奴は絶対殺す……。」

「矢は沢山残ってるしね！」

美羽は男性陣を睨みつけ、芳美はニコニコとしていた。
祐樹は、ここぞとばかりに喋りだした。

「覗きてえなあ……。なあ？翔一？お前誰の裸一番みたい？」

翔一は、今までの空気を覆す祐樹の言葉に、耳を疑ったが、祐樹なりの場を和ませるための作戦なのだと思い、
乗る事にした

「そうだな。俺は寺道さんかな。大人の女の魅力というか。」

氷室が怒るかなと思ったが、若干にやけているようにも見える。

「俺も封印師だな・・・。」

まさかの氷室が乗ってきた。氷室が笑いを堪えている。

祐樹は場が和んだ事に、とても喜んだ。祐樹は皆に話を振る。

「山瀬と、木村、安藤、小林は？」

木村が答えた。

「俺は菅野だよ。てか、隠れファンだしね。さっきの戦いであいつの前で体張ったのは、ポイント稼ぐためでもあったんだ。」

皆がどつと笑った。どんどんと空気が良くなっていく。

小林が続く。

「俺は山内と菅野どっちも頂きたいな。あの封印師つてのもいい女だな。」

小林らしい発言だと皆が思った。安藤は、

「まあ、全員いいよ本当。だけど、部活の時によく山内みかけたし、走ってる姿とかすごいかったよ。」

いいなとは思ってたよ。一回、球が、陸上部の方に飛んでって取りに行ったとき、山内が走る姿見て、可愛い子だなって思ったことがある。よって、山内美羽に一票！」

「一票！」に皆が微笑んだ。山瀬が口を開く。

「僕は……。」

皆が息を呑んだ。山瀬は誰が？

「僕は、二次元にしか興味がないんだ……。」

「二次元てなんだ？」

翔一が尋ねた。祐樹以外は分からないようである。

「はいはい！そうか。まあそれもありだよ山瀬！俺も、二次元の子大好きだからね！」

そして最後に祐樹が言った。

「俺は、山内だね。あのプロポーションは犯罪でしょ。」

皆がお前の顔が犯罪だと言って笑った。そして祐樹が続けた。

「実はさ、道案内してくれた血牙の子いたじゃん。珠美って子。まあ、あいつらの仲間だったけど、俺、
すげえタイプだったんだよね。不謹慎かもしれないけど……。」

珠美を知る、翔一、安藤、山瀬は驚いた。確かにすごく美麗な顔をしていて、ロリコンの祐樹が惹かれるのもおかしくないと思ったが……。

〓

同時刻、旅館内。

旅館内には生きたまま天井からロープで吊るされた人間達がわめいている。その中には翔一達の教師、旅館で働いていた人間たち、他、島の住人達である。

美しい顔の女の子が言った。

「母上……。ムガまで簡単に死なせてしまったそうですね……。その程度の采配しか出来ぬとは、我が母として大変遺憾でありますぞ。」

そう言ったのは、先程祐樹が好みだと言った、「珠美」であった。今は真つ白な着物を着ており、長く美しい黒髪で、先程翔一達と会った時は違う人物に見える。

母と呼ばれたのは旅館の女将だった。女将は深々と頭を下げる。

「申し訳ありません。こちらの目測を誤まっております。」

なぜか母親が娘に頭を下げる。そしてそれに続き、珠美が声を上げた。

「いいか皆の者。我が一族の60もの血が流れた。我々一族は危機に瀕している。だが……。」

そう言つて珠美は、吊るされている50人以上の人間達を見た。

「我々の神聖なる血により、あやつらヒトも一族に加えてやろう。そして我々一族の悲願を果すのだ。寺道を殺せば、一族の古来より願いも可能になる。では、始めよ！」

血牙達が人間達に襲い掛かっていった。珠美の母は、一人だけ寂しげな顔をしていた・・・。

解放されし力

全員風呂に入り終わり、体を乾かせた。皆修学旅行で持ってきたバスタオルがあつたのでそれで拭けたが、もしなかったら大変な事になっていた。

着替え終わった皆の前に、新しい袈裟を着た寺道が立つ。まだ乾いてない美しい黒髪に、男性陣はぞくりとするものがあつた。

「では聞いて欲しい。私は考えた。今まで何百年と、人と血牙一族の共存のため、我々封印師と呼ばれる一族は島を守り抜いてきた。だが……。やはり無理なのだと思う。私の両親は20年前の災厄で命を落とした。私は血牙と人に育てられてきたのだ。だが、生まれ持つての寺道一族の血、能力は幼いながらも受け継いでいた。私は一人で両親の残した書籍を読み、独学で様々な事を学んだ。しかし、血霧丸には命が宿っており、私に道筋を教えてくれた。剣技を教えてくれたのも血霧丸だ。そして、今回の災厄で、私は血霧丸と話し合いをした。結論は……。

血牙一族を滅ぼす事。だがそのためには、お主たちの力が必要だ。」

そう言つて寺道は頭を下げる。

「私に命を預けてくれ。死んでしまった桐谷君のためにも、もうこれ以上人間を犠牲にする事は出来ない。血牙達を倒すには、お主たちの力が不可欠だが、今のままでは長と一族全ての総力戦になつた場合、万に一つも勝ち目は無い。そこで、ここからもつと上に行つたところに、ある物がある。「帰郷の宝玉」と呼ばれ、人以外は触れることが出来ぬ。その宝玉に触れることにより、ヒトの潜在能力を引き出すことが出来る。ただ、全員ではない。

例えば海野君はボクシングの達人だが、能力が開放出来れば、一撃で血牙の腹に穴を空ける事も可能だろう。」

寺道に一気にまくしたてられ、翔一達以下皆は混乱状態にあった。小林が叫ぶ。

「お！俺は戦いなんてしたくねえ！能力もいらねえ！」

そう言ってびびっている。木村が小林の目の前に素早い右ストレートを寸止めた。

「じゃあそのまま一人で死ねよ。付いて来るな。助かりたきゃ戦え。死にたきゃ残れ。」

小林は木村の表情を見て、「わ・・・わかった・・・。」と答えた。

全員が無言で荷物もまとめる。氷室が翔一に呟いた。

「俺に能力がついて・・・お前につかなきゃ・・・速攻なのにな・・・。」

ニヤつく氷室。翔一は、

「そんなときゃ、お前がみんなを守ってやれよ。特にお互いタイプの寺道さんな。」

そう言っただけ苦笑する。

小屋の外は若干の霧が出ているものの、それ程ではなかった。寺道を先頭に最後尾は氷室と翔一が守る。

芳美は弓をいつでも撃てるようにしていた。

20分ぐらい獣道のような所を必死で登っていく。寺道が途中皆に声をかけるが、全員必死で登っていく。祐樹の腕の傷は驚くほど回復していた。

「あれだ。」

小さな湧き水の辺に小さな祠がある。寺道はその祠の前に血霧丸を置き。何やら念じている。

祠から淡い黄色の光が発行し、そしてその光は消えた。

「寺道さん今のは？」

翔一が尋ねた。寺道はこちらを振り返って言った。

「解放の術というものだ。この術をかけなければ、ただの玉にすぎないのだ。さあ、一人ずつ触ってみてくれるか。」

そう言って祠を開ける。中には大きな水晶みたいなものがあつた。先頭の美羽が宝玉と呼ばれる物に触る。

途端自分の両足に眩い光が現れた。だがそれはすぐに消える。寺道は、笑顔でいる。

「これって……。」

「うむ。説明は後です。どんどん触れていってくれ。」

祐樹が玉に触れると、頭部全体が光った。やはり美羽のようにすぐ消えた。

山瀬は何も起こらず、小林も木村も何も起こらない。安藤は体全体が光る。寺道は「ム！」と言った。

「おお！なんだこれ？こわ！」

寺道が語りだした。

「今のは君の能力ではない。親しい友人が体に入っていくのが分かった。恐らく、比べ物にならないぐらいの身体能力になっているはずだ。」

安藤は軽くジャンプしてみた。

「うわあ！」

軽くジャンプしたつもりが、2mもの高さまで飛び上がってしまったのである。皆驚く。

「親しい友人てまさか……。古賀か……。」

バットを振ってみる。振った時にバットが光輝いた。安藤は泣いた。

「古賀……。力、貸してくれるのか……。ありがとう……。」

そして芳美が手を触れる。背中の中の弓が光り始めた。みんなは、芳美が能力解放されるなら、間違いなく弓だろうなとは思っていた。芳美は弓を持ち、一本を遠くの木目掛けて放つ。矢に光が宿り、大木を貫いた。そしてその矢は止まる事なく、何処までも飛んでいった。

「お母さん……。」

芳美は弓を持ってそう言った。翔一、美羽、祐樹はお母さんと言った芳美の顔を見ていた。まさか、あのいつも持ち歩いている弓は……。

ツカツカと氷室が玉に触れに行く。

「氷室君。今は邪念を捨てる。でなければその玉は完全な『正』だ。邪の心を持っていれば、反動で死ぬ事になる。」

氷室は頷くと、目を閉じてそれに触れた。瞬間、氷室が苦しみだした。

「ぐわあああああ！！！！」

のたうち回る氷室。しかし寺道は黙ってみている。全員がかけやる。

「氷室！おい！しっかりしろ！」

口から泡を吐いて、顔面には血管が浮き出ている。そして動けなくなった。

死んだ……。氷室が……。皆呆然としている。

しかし、氷室がすくりと立ち上がった。首を回して、体を動かす。そして、凄まじく速い突きと蹴りを繰り出した。翔一目掛けて回転蹴りを放ってきた。

翔一はスツと避けて構えた。

「すげえ・・・なんだこの力は・・・。死ぬかと思ったぜ・・・。」

「

皆分かった。今の氷室の動きを見て。桐谷の魂が、氷室に宿ったのだと。

氷室は、野生動物の様な速度で木に向って走り、突きを放った。凄まじい轟音と共に大木がメキメキと割れて倒れた。氷室の拳は光っている。

「けっ・・・こんな形で、敵に助けられちまうとはな・・・。」

氷室も分かっていた。桐谷が自分の力になってくれたという事は。翔一は氷室の肩を叩いて、最後の一人として玉に手を触れた。

両手が黄色く光る。そして両足、腹、顔、体全体だった。

「やったぜ・・・。」

翔一はその場でシャドーした。人間のスピードではない。まさに「光速」ボクシングの世界チャンピオンも一撃で倒せるだろうというスピードだ。氷室は翔一を見て苦笑いした。

「どうやら力の宿った者は、美羽さん、祐樹くん、安藤君、芳美さん、氷室君、海野君のようだ。これだけの戦力があれば、なんとかなるかもしれぬ。美羽さんの能力は恐らく『神速』血牙の長でも貴女には追いつけない。それから祐樹君の力は、恐らく『光滅』念じる事により、相手を光の力で存在自体消し去るもの。超能力と言えば早いかもしれない。力の得られなかった人は、あまり無理はす

るな。なんなら安全な場所で隠れていてもいい。」

翔一が言った。

「すぐやるんですか？」

寺道が答える。

「いや、まだやるべき事がある。まだ先は長いがついてきてくれ。」

そうして寺道一行は、更に上へ上へと進んでいった。

解放の地

翔一達一行は、皆押し黙って寺道の後を着いて行く。
しかし、程なくして能力を「解放」された者達が、力を失うのを感じた。

「寺道さん・・・力が沸いてこない・・・。」

翔一が先頭を歩く美しい黒髪の女性に、そう声をかけた。
寺道が歩みを止めて振り向く。

「詳しい説明は、今向っている所に辿りついてからする。とりあえず、そこまで皆付いて来てくれ。」

然程、距離は無い。」

それだけ言うと、また寺道は軽やかに山道を登っていく。
体力の無い山瀬に、木村が肩を貸し、祐樹には安藤が手助けをしていた。

「おおい・・・俺も・・・。」

小林が皆に助けを求めるが、完全に放置されている。皆ぞ知らぬ顔で山を登る。

小林の心の中には、憎悪が渦巻いていた。

（氷室・・・木村・・・お前らまで・・・クソが・・・）

憎しみは霧を濃くさせる。小林だけには、それが理解出来ない。
芳美の後ろを歩いていた翔一が、彼女に声をかけた。

「菅野。お前の弓って、もしかしてお母さんの物か？」

「馬鹿！」

芳美にぶつきらばうに質問した翔一を、美羽が怒鳴りつけた。前を歩く祐樹も耳を傾ける。

芳美は、にこりとして振り返った。

「そう……。この弓は、死んだお母さんの形見。ずっと、ずっと大切に扱ってきたんだよ。だから、どんな時でも、修学旅行でも、お母さんと一緒に居れる気がして。お母さん。生前にこの土地に来たいって言ってたんだ。この島は違うけどね……。でも、お母さんと一緒なら、乗り越えられる気がする。」

芳美の母は、二年前に急死した。丁度、翔一の父親が殺人事件を起こしたのと同じ時期である。

翔一は、腐っても葬儀には参列した。死因は、心不全だった。元々心臓の弱かった芳美の母親は、幼い頃より弓道をしており、そして芳美もそれに習った。翔一は、必死で涙をこらえながら、拳を握り締めて耐えていた芳美の姿を思い出した。その時、美羽と祐樹も参列した。

「悪い……。本当に……。悪い……。」

翔一は芳美に頭を下げた。芳美は笑顔で微笑んだ。

「お母さんも、海野の事すごい心配してたから……。今の海野見て、きつと喜んでるよ！」

と言つて、少し涙ぐみながら微笑んだ。翔一の胸にもぐつと来るものがあつた。

そして翔一は言った。

「お母さんのためにも、俺が守つてやる。桐谷と約束したんだ。俺が、守りますから……。」

翔一は、芳美の弓にそう語りかけた。美羽は優しい表情をしていた。祐樹も何も言わなかったが、心の中では笑みを浮かべていた。

「着いたぞ。」

寺道に続き、全員が10メートル四方の広場にたどり着いた。中央には巨大な岩があり、その岩に紐が結びつけられている。

「ここは、解放の場と呼ばれる場所だ。先ほど、帰郷の宝玉によって力を得た者達。お主達の力は、常に使えるわけではない。潜在能力を使うには、激しい体力を消耗する。使いすぎれば死に至る場合もある。」

翔一達、「力」を得た人物達は、「死」という言葉を聞いて萎縮した。寺道が続ける。

「能力の解放は2分程度が限界だ。それ以上使うと、死ぬ。よく憶えておいてくれ。それから、一度能力を解放すれば、しばらくの間動く事もままならなくなる。それもしっかり憶えおいてほしい。」

（死ねよ！死んじまえ！俺だけ、のけものにしやがって！）

小林がそう思った瞬間、彼の頬をクナイと呼ばれる投器が掠めた。寺道が投げたのである。

「いい加減にしないか。その様な気持ちを持っていると、奴らの力は強大になりすぎる。氷室君より、君が一番負の力が強い。仲間を仲間と思わぬならば、とっとと去れ！」

物凄い眼光で小林を睨みつける寺道。気の弱い小林はすぐに平謝りした。

「ごめんなさい！心入れ替えます！」

皆は呆れた顔で小林を見つめる。しかし、心を悟られると分かった彼は、何も考えないように努めた。ただ、死にたくなかったからである。

「で、またあの漫画の主人公みてえに強くなるには、どうすりゃいい？」

氷室が寺道に尋ねる。寺道は答えた。

「解放の方法は簡単だ。立ったまま全身の力を抜く。目を閉じ、大きく一度深呼吸をする。そして、一言呟け、『放』と。力を解く時は『解』だ。忘れるな。『解』だ。」

早速氷室が始めた。全身をリラックスさせ、目を閉じる。頭の中には憎き・・・いや、もう憎くはないのかもしれないライバル、桐谷の顔が頭に浮かぶ。大きく深呼吸をし、若干照れくさかったが、彼は呪文を口にした。

「放！」

氷室の体に淡い光のオーラが纏われた。氷室はニヤリとすると、その辺の木々にまるで乗り物に乗っているかのような速さで移動し、蹴りや突きを放つ。次々に倒れていく木々。氷室は、瞬時に翔一の目の前に来て、止まった。

「今なら・・・お前殺れるな・・・。」

翔一の目の前で不敵に微笑む。そして翔一もニヤリと笑い、力を解放した。

翔一に対して強大な威力の蹴りを放った氷室。その蹴りを左腕一本で翔一は防いだ。

そして翔一は右の高速パンチを氷室目掛けて打ち込んだが、それを氷室が手で受け止める。

両者が、にやけながら、互いに人の力の領域を遥かに超えた争いをしていた。

氷室が「解」と呟く。すると、どさりと氷室が倒れこんだ。ぜえぜえと息をしている。

「こいつは・・・やべえぞ・・・。大体・・・二分だと思ったが・・・。死にそうだ・・・。海野・・・。もう解け・・・。はんぱねえぞ・・・。」

氷室は大の字に倒れ、目を閉じた。動けない。息をするのもやつとだった。

翔一も力を解いた。

「ぐう……。」

膝から崩れ落ちる。眩暈がする。翔一は前のめりに倒れた。皆が心配して駆け寄った。寺道が語る。

「すまない……。大きなリスクになる。だが、血牙一族を殲滅するには、これしか方法が無い。命を私に預けてくれと言ったのは、こつという意味なのだ……。」

寺道が憂いな表情で下を向いた。だが、芳美、美羽、安藤、祐樹も力を解放する。

芳美は、木々を凄まじい速さで矢を何本も放ち、それらは見事に貫いてく。美羽は、何かが動いているというぐらいしか分からない程のスピードで辺りを駆け回る。回りからはそう見える美羽だったが、彼女は違った。

「周りが止まってる……。時が……。」

彼女が動いている時は、周りの動きがほぼ止まっているかのようなスローに見えるのだった。

これが寺道の言った「神速」まさに神の如き速さである。

そして安藤は、本気でジャンプしてみた。高い。20メートルは跳んだ。だが彼は全く恐怖を感じなかった。

そこで空中でくるくる回りながら着地し、中央にあった岩にバットを思い切りフルスイングした。

しかし、岩は碎けない。もう一度叩き込むが、その岩はびくともしなかった。

祐樹は先ほど言われた通り、一本の大木に念じてみた。

（砕ける）

眩い光と共に、大木が粉々に砕け散った。そして破片が飛ぶこともなく、跡形もなく消え去った。

これが、「光滅」という祐樹の力だった。

「こ、こええ！」

祐樹は自分の力に驚き、すぐに力を解いた。どさりと倒れこむが、使用時間が短かったので、息が切れる程度で済んだ。

ひたすら岩を殴る安藤。木々で力の使い方を練習する芳美、ひたすら駆ける美羽。翔一が叫んだ。

「そろそろ解け！死ぬほどきついぞ！てか、死ぬぞ！」

皆はその声を聞いて、力を解いた。三人が地面に這い蹲る。翔一と氷室はなんとか地面に座る事は出来たが、まだ息が全く整わない。痙攣している三人を見て、祐樹が叫んだ。

「寺道さん！菅野達か！」

寺道は三人の生命力を心眼で見る。大丈夫……。時間が経てば戻る。そう確信した。

「大丈夫だ。しばし休めば回復する。」

祐樹はそれを聞いて安心した。全員能力を見ていた、木村、山瀬、小林は、ただ啞然としていた。

特に木村はボクサーとしての力があるので、自分に力が宿わなかったことを嘆いた。

安藤が喋った。

「き・・・きつ・・・。ハアハア・・・。それに・・・しても・・・あの岩は・・・なんで・・・？」

安藤が能力を解放しても砕けなかった中央にある岩。無論普通の人間なら巨大な岩をバッドで砕く等不可能だが、力が宿りし武器には、砕けぬものなどない。しかし、なぜかこの岩は欠ける事もなかった。

寺道が語りだした。

「この岩は、只の岩ではないのだ・・・。」

若干の悲しみを帯びた表情を店、封印師、寺道師道が語りだした・・・。

守り神 そして襲撃

「この岩は、解放の岩と呼ばれている……。」

寂しげな表情で口を開いた寺道を、皆がみつめた。寺道が続ける。

「解放の岩には、この濃霧島の神が宿つていると言われている。

まだ両親が生きていた頃、聞いた話なのだが、

解放の岩の神は、人と、血牙一族の共存を望んでいた。だが、血牙一族が人を襲い出せば、意思とは関係なく食い殺されてしまう。そのためこの岩に住むという神は、人間達が滅ばされぬように、お主に宿した力……。潜在能力を引き出し、対抗させるようにしているという……。血霧丸であっても、詳しい事は私に語りかけはくれない。だが、ここを守護する一番の長は、人も、血牙も違いはないと思っているというわけだ。」

翔一達は、話を聞いていて、スケールの大きさに驚いていた。超能力の上に神様、意思を持つ刀……。寺道の魔法のようなもの……。だが、全員がもう、すべての事に慣れていた。

「この岩は誰も傷つける事は出来ん。例え血霧丸であってもな……。」

そう言って岩に一礼した。

「どうか彼らに力をお貸しください……。」

寺道はもう一度一礼した。その時、寺道の顔色が変わった。翔一達の後ろを睨む。

皆が後ろを振り返ると、そこには・・・旅館の女将が一人で立っていた。

「早く逃げなさい・・・もう時間はありません・・・。」

翔一達は耳を疑った。そして姿形が人間のままである、血牙の長に対し、その表情は悲しみを浮かべている。

「ジュレイよ・・・やはり我々と、血牙一族の共存は出来ぬ・・・。この島は滅ぶべきだ。」

寺道が女将にジュレイと名を呼び、女将は寂しい表情で語る。

「やはり・・・そうですか・・・。いつかは決着をつけなければならぬと思っています・・・。長は相当にお怒りです・・・。総攻撃も間もないでしょう。私の娘であり、一族の長、珠美は感情の無い子・・・。普通には殺されませんよ・・・。ですから、私がこの場で楽にしてあげましょう・・・。」

そう言った瞬間、ジュレイの着物が破け、美しい裸体が現れた。男達は唾を飲み込んだが、それも束の間、体が一気に5m以上の大きさになり、茶色い毛が生えだした。顔はゴリラの様に変化し、無数の牙が口から飛び出した。そして血牙特有の爪は、ムガよりも長く、爪というより金属がそのまま両手に付いている。

「ギガ！ルガ！」

ジュレイが恐ろしい変貌を遂げ、地獄の底から這い上がってきたような声で、その言葉を言った。

翔一達が登ってきた坂を、先ほど倒した、ムガにそっくりな血牙二

体が駆け上がった。

「兄貴をよくやってくれたナ・・・兄貴も情けねエなあ！こんな人間達二やられちまってよお！」

ギガが言った。ムガと見た目はなんら変わりはない。しかし、ムガよりも凶悪そうな印象を受ける。

「悪いけど、兄貴の敵は取らせてもらう。美味そうだなあ。お前ら。」

舌なめずりをするルガであった。若干、ムガとギガより大きい。喋り方は人間ぽく一番丁寧だった。

ジュレイが言葉を発する。先程とは違い穏やかな口調ではない。

「準備はいいか？楽に殺してやるからな・・・。」

そして三匹が駆けて来た。翔一、氷室はすぐに力を解放した。翔一はギガに飛び掛り、氷室はルガへ。寺道はジュレイへと向かった。走る最中寺道が声をかける。

「他の四人はすぐに力を使うな！海野君達の力の限界が来たら、美羽さんが解放し、すぐに避難させて芳美さんと安藤君、森君で防いでくれ！」

血霧丸を握り締めて駆け抜ける寺道。翔一と氷室は既に戦いを始めていた。二匹はムガよりも強い、凄まじいスピードとパワー。だが、氷室と翔一の解放された力には到底及ばない。

『神拳』寺道が名づけるなら、そう言ったであろう翔一の荒れ狂う無数のパンチ。ルガは、爪をどれだけ振り下ろそうと、その隙に何十発ものパンチを体中に浴びせられる。だが、やはりただの雑魚とは違い、ダメージは与えれど、拳をひたすら叩きこんでも倒すには至らない。大木ですら一撃で破壊する威力であるのだが。

「ぶっほおお！！なんだ・・・ガキ・・・ぐは！」

ギガは氷室の正拳突きを一撃受け、大量の血を吐いた。氷室は二ヤニヤしながら膝についているギガの即頭部目掛けて光の蹴りを放った。

10メートル吹っ飛ぶギガ。頭の半分が欠け、氷室の足に肉片やら血液がこびりついた。

「よええ・・・。」

そう思っ、寺道の手助けに行こうとした瞬間、いきなり後ろを？まれた。

「馬鹿だなオマエ！兄貴の再生能力を知らなかつたのか？」

物凄い力で締め付けられる。氷室は右の肘でギガの右の脳を打ち抜く。苦しむギガ。だが、すぐにまた細胞が再生されていく。氷室はとりあえず、ギガを投げた。

「じゃあ・・・脳味噌だな・・・。」

氷室はそう言ってギガに近づいていった・・・。

翔一は、高速のパンチでルガにひたすら拳を放っていた。何も出来ないルガ。そしてフィニッシュブローで、全体重を乗せた右ストリートを腹めがけて打ち込んだ。拳は腹部を突き抜け、ルガは倒れふす。翔一は拳を抜いた。だが、すぐにルガは立ち上がる。氷室の相手をしているギガと同じで、あっという間に傷が修復されるのだ。

ジュレイと一進一退の攻防を繰り返している寺道が叫んだ。

「もう時間だ！解け！二人とも！美羽さん！」

二人は躊躇いながらも能力を解いた。活動時間を30秒もオーバーしており、まるで地面に張り付けられているかのような感覚、吐き気、眩暈、頭痛がする。

ルガの鋭い爪が翔一の頭部目掛けて振り下ろされる。氷室は捕まれ、体の骨ごと砕かれそうになる。美羽が能力を解放した。

自分の周りの時間が止まる。ものすごくゆつくりと翔一の頭部目掛けてルガの爪が振り下ろされていく。美羽は一瞬で走り込み、安全な場所へと運ぶ。もうルガの爪は翔一がいた場所の地面を貫いていた。急いで、氷室の所へと走りこむ。スローモーションであるが、氷室が苦痛の表情を浮かべるのが分かる。氷室の体を掴み、脚力でギガから氷室を奪い取った。その際、ギガの爪が全て折れた。まだ宙に浮いている。

二人を運び、とりあえず力を解放した。

「イテエエ！！！」

ギガは何が起こったのか分からない。一瞬の内にガキが居なくなり、自分の爪が折れているのである。また力を込めて爪を再生する。

ルガの方も、確かに殺したはずの子供がいない。

「なんで、あんなところに……。」

ルガは遠くにいる翔一と氷室を見つけてそう呟いた。

刀と金属の爪でぶつかり合いをする寺道とジュレイ。お互いに力に差がなく、一進一退の攻防が続く。

ジュレイが喋った。

「神速を使える者がいるのか……。厄介だ……。」

言葉とは裏腹に恐ろしい顔で寺道を殺しにかかる。寺道は言った。

「神速だけではない。お前らでは、我々には適わん。」

寺道がそう言った瞬間、ギガとルガは後ろの8人に襲いかかっていった。

そして、安藤、祐樹、芳美の体が黄色く光る。

凄まじい速さで迫り来るギガとルガ。三人の力が解放される。

人と血牙の共存のために

無数の光の矢が、ギガの体を貫き通す。ギガはもがき苦しんだ。七本目の矢が、頭部に命中した。

それは光に包まれた矢は脳に大穴を空ける。修復しようとするギガ・。。だが、出来ない。

「そ、んな・・・馬鹿な・・・ジュレイサマ！」

頭部から大量の血液が流れ出し、ギガは倒れた。そして死んだ・。。

安藤はルガに走り込み、思い切りジャンプして頭にバットを振り下ろした。腕で防いだルガは、腕が砕け散る。そして、腹部へとフルスイングで放ったバットにより、ルガの体は真つ二つになった。必死で細胞を再生するルガだが、その瞬間ルガの体がパーツと光輝き、そして粉々に砕け肉片は消滅し、ルガの形は欠片も残っていない。

「光滅!？」

ジュレイは驚いた。一番厄介な力だ・・・。ジュレイは考えた。間違いなく、自分は死ぬ事になると。一度大きく後ろに退いた。

「ちよつと待ってくれ。」

そう言って、ジュレイは先程の女将の姿に戻った。裸体のままである。そして先程の優しい口調で話し出した。

「お願いですから、島から出て行ってください……。どうやら・
・私だけでは勝ち目はありません……。
神速……。光滅……。特にこの二つの能力を持つ者がいては……。」

敵に背を向けて話すジュレイ。小林だけは、なめるような目つきでジュレイの体を見ている。
木村に殴られる。

寺道が答えた。

「それは出来ぬ。人間と血牙一族。その共存を見守ってきた我々寺道一族と、神の意思である血霧丸の判断だ。」

ジュレイはこちらを振り返り、強く叫んだ。

「人を襲ってしまうのは我々の意思ではありません！人が、この島から出て行けばいいのです。我々一族だけ、暮らしていれば……。」

「しかし、絶対に人間はここに来る。20年前の事件の時に、島から逃げ延びた人間が、パソコンでこの島の事を書いている。私の両親の事までな。その度におぬし達一族は変貌し、島に来た人を襲う。もう、終わりにしなければならぬ。」

ジュレイがまた叫ぶ。

「では！私達は何処へ行けばいいのです？私達は1日以上は、この島からは出られない。解放の石があるから、生きていられられん

です。」

冷たく寺道は言い放った。

「申し訳ないが……。もう、他に選択肢はない……。」

ジュレイはその言葉を聞いて崩れ落ちた。翔一は疑問に思っている事を訪ねた。

「あんた、あの珠美って子の母親だよ？なのに、なんであいつがあんたらの長なんだ？」

ジュレイは俯いたまま語りだした。

「我々一族の長というのは、血牙の子を産むことが出来る者です。ある一定の年齢に達すると、子は埋めなくなります。そして血牙の女は100年に1度生まれれば良いと言われているのです。ムガ、ギガ、ルガ、その他、大勢の血牙は、珠美の子です。」

皆は驚いた。中学生ぐらいの子が、子供を産むなんて……と。

「長と交配出来るのは、一番強い男だけ。そして、ムガ達のような力を持つものは、稀にしか生まれません。ですから、あなた方には敵でも、私にとっては可愛い孫だったのです……。霧さえなければ、あなた方と変わらない少年ですよ。」

寺道はムガ達の普段の姿も知っているので、本当は辛かった。普段は普通の少年達。だが、血牙となってしまうえばもう、違う生物である。翔一達は絶句した。ジュレイは着物を羽織り、こちらに向き直った。

「我々も一族の血を絶やすわけにはいきません……。いくらそれだけ力があっても、我々一族の総攻撃、そして長、珠美、私の夫……。全員が来れば貴方は無惨に殺されるでしょう……。覚悟しておいてください……。さようなら……。」

そういうとジュレイは宙に浮かびあがり姿を消した。

翔一は、何かやりきれない思いだった。なんとかしてやれないのかと……。

「寺道さん……。なんとかしてやれないのか？あの女将は……。悪い奴じゃないだろ……。どっちも悪くないんじゃないか……。」

翔一がそう言うと、芳美が続いた。

「私も、寺道さん。なんとか出来ないんですか？何か方法は……。」「

皆、寺道の顔を見る。寺道は、下を向いて考えていたが、口を開いた。

「方法の一つだけある……。だが……。全員死ぬ事になるかもしれない。それにその方法は、血牙一族全部と戦闘している時にしか使えない……。更に、成功する保証も無い。試した事がないからな……。」

寺道が悲しげな表情で言った。氷室が言う。

「方法あるなら、やればいいんじゃないか？くせえ奴らは、くせえ同士でひっそりのんびりやっててくれりや助かる……。」

氷室が遠くを見つめて言った。皆頷いていた。

「お、俺は嫌だぜ！俺は死にたくねえ！」

小林だった。すぐに木村が左フックで殴り飛ばした。そしてマウントを取る。

「なあ？お前何処までチキンなんだよ。今助かったの誰のお陰だ？俺とお前は何もしてねえだろ……。封印師さんや海野や氷室さん達がいなけりや、どうせ死んでたんだぞ。わかるか？」

無表情で小林を睨みつける木村。山瀬も答える。

「ぼ……僕も……死にたくない……。ずっと……助けてもらって、ありがたいけど、死ぬのは嫌だ……。」

美羽が寺道に訪ねた。

「寺道さん。その方法ってどんなのですか？それに必ず……死ぬんですか？」

寺道はすぐに返答した。

「方法は直前まで教える事が出来ぬ。訳があるのだ。それから、死ぬというのは確証はない。試した事がないからだ。」

翔一が呟いた。

「あいつらと話し合いしたらいいんじゃないか？あの珠美って奴と。長つてぐらいだから、俺みたいに馬鹿じゃねえだろうし。」

その言葉に一同が頷いていた。寺道は「分かった」と言うと、「伝心」という力で珠美へとメッセージを送った・・・。

不和

翔一達の旅館内では、人間達が生き血を吸われ、次々と血牙一族と同じ姿へと変貌していった。

そして、血牙に血液を注がれ、同種となった人間達は、元の血牙よりも強靱、恐ろしい生き物へと変貌した。

長の珠美は高らかに声をあげ、笑った。

「ははは！ヒトが、我々一族よりも力を得るのは気に食わんが、こやつらには全く意識がないからのう。寺道及び濃霧の神の力を得たあやつらヒトのガキでも、こやつらと、私、母上、そして父上、お前たち全員にかかればひとたまりもなかるう。」

幼くも美しい容姿の少女は、冷ややかに語る。そこにジュレイ・・珠美の母親が戻ってきた。

「申し訳ありません・・・。ギガとルガが・・・倒されました・・。私は逃走してまいりました・・・。」

その瞬間、珠美が右手をかざすと、ジュレイは10m吹き飛び、壁に背中を打ちつけた。激しい衝撃が身体をかめぐる。そして、倒れているジュレイの元へ、スッと移動してきた珠美が言う。

「母上・・・。まさか、何も出来ずにギガとルガも死んだ訳ではありませんよね？」

冷徹な視線で自分の母親を見下す珠美。ジュレイは答える事が出来ない。

「情けない！本当に元、我が一族の長か！私の可愛い子達を見捨てて、自分だけ逃げてくるとは……。」

珠美は下を向いて、涙を流し始めた。ジュレイは俯いたままである。その時、珠美の脳裏に声が聞こえてきた。

（寺道師道だ。長、珠美だな。）

寺道が伝心の術を使い、遠くから珠美の心に問いかけている。珠美もそれに呼応した。

（何の用だ人間。もうすぐお前らを皆殺しに行く。そちらもその気らしいしのう……）

寺道はしばし考えた後に心を送った。

（私と一緒にいる少年少女達は、ヒトと血牙一族の共存を望んでいる。私がお前たちを根絶やしにすると決めたのにも関わらずだ。それは、お前の母であるジュレイも望んでいる事。）

珠美は母親の顔を見た。珠美以外には寺道の声は聞こえていない。

（それが何だ？人間達は、封印により我々が人間達と変わらない時でも、迫害を受けてきた。母上は長ではない。決めるのは全て私であり、一族の決意は変わる事はないだろう。）

寺道は取って置きの言葉を伝える。

（お前が……人と血牙、両方の血を引く者であったとしてもか

？)

珠美は絶句した。そんな訳がない。自分は血牙一族。父も、母も紛れもない同じ「血」が流れている者だと。

「ふざけた事を抜かすな！」

珠美は絶叫し、長い髪の毛が生き物のように宙を舞った。その先は全てがナイフの用に鋭い刃になっている。そして、宴会場全体が震えた。

「あー・・・あんまり・・・暴れるんじゃねえよ珠美・・・。」

ドスンドスンという音と共に、巨大な生き物が現れた。身の丈10mはあるだろう。白髪に、紫色の肌、体中にイボがあり、血管が浮き出ている。体の全筋肉が盛り上がり、目じりが釣りあがっている。

「父上・・・。」

父上と呼ばれたのは、血牙一族最強の男、「セツエイ」と呼ばれるものだった。一族全てが頭を下げ、珠美でさえも頭を下げた。

「おい寺道。まったく・・・俺と母ちゃんが隠してた事を言っんじやねえよ・・・。めんどくせえなあ、おい。ちよっと寺道黙ってる。」

セツエイだけには二人の伝心が聞こえていたようで、こちらに向かってきたようである。

「事実だ。俺はお前の父親じゃねえ。」

セツエイから発せられた言葉に、珠美は絶句した。

「そんな・・・父上・・・？何の冗談でございますか・・・？」

「冗談じゃねえ。お前は、母ちゃんと人間の子だ。お前の母ちゃんが長になる前にな。母ちゃんは人間と恋に落ちた。で、出来たのがお前だ。その事実を聞かされた時、そいつを頭からバリバリ食ってやったがな！」

そう言って欠伸をするセツエイ。珠美は体が震えだした。

「汚らわしい・・・。人の血等要らぬ・・・母上・・・なぜ私を産んだ・・・。」

ジュレイは、答えた。

「私は・・・人間が好きだった。だから自ら近づいていった。確かに私たちは迫害されてきました。封印が解ければ化け物になると、だけど、その人は違った・・・。貴女には本当に申し訳」

瞬間、珠美が大声を上げて、ジュレイの首に手をかけ、天井まで飛び上がった。そして部屋中の壁にジュレイをぶつけながら、最後には床に思い切り叩き落した。ジュレイは、死にかけている。

「おいおい・・・母ちゃんに手荒い真似すんな。長さん？おい。な？長でも俺に適うか？」

セツエイは、ジュレイを抱えると、珠美に口から無数の針を飛ば

した。瞬時に避ける珠美。

「申し訳ありません。父上……。」

頭を下げる珠美。そして珠美が続けた。

「今聞いたことが事実であるならば、私に長の資格はありません。父上が権限をお持ちくださいませ。」

セツエイはジュレイを下ろし、頭を掻いた。

「んな面倒くせえ事出来るわけねえだろ！指揮はお前がやれ！人だろうが血牙だろうが、長の資格は、変わる事はありません。俺達下は、長の命令には基本逆らえねえんだよ。俺はたまに逆らうけどな。」

そう言ってセツエイは笑った。珠美は、体中に力を込めて叫ぶ。

「ならば！ならば皆の者！血牙一族、全総力を挙げて、人間共を根絶やしにしろ！母上の傷を私が癒し次第、皆殺しに行く！」

旅館内の血牙一族は大きな咆哮を上げた。人から血牙となった者達は、凶暴さ故に他の血牙達に捕まれている。

「ま、やるならしゃーないわな。」

最強の実力を持つ血牙一の猛者セツエイは呟いた。実にやる気が感じられない。

寺道は、伝心により聞いた内容を、翔一達に伝えていた。皆ガク
リと首を落とす。
寺道は続けた。

「それでは行こう。濃霧の神木と呼ばれる場所がある。戦いにも
うってつけ、そして、奴らを人に戻すには、そこに行くしかない。」

皆、何も言わなかった。ただ自分の荷物を持つと、立ち上がった。
決戦は迫っていた・・・。

最後の休息

「濃霧の神木」というのは、この濃霧島の一番の高台に位置する場所にあると、寺道は説明した。

皆はひたすら、道なき道を歩いていく。誰も一言も言葉を発する事はない。

戦いは、命を懸けた戦いが、近づいていた。そして、小林以外の全員は、血牙一族の想いを知り、なんとかしてやりたいと思っていた。

どれだけ歩いただろう。途中に、以前翔一達が、豪雨と強風から逃れたのに似た小屋があった。寺道が言う。

「あそこで、最後の休息を取ろう。次の戦いは、私ですら命を落とすかも知れん。皆の覚悟、そして結束力が必要だ。充分に体力を養え。」

そう言っつて小屋の扉を開く寺道。寺道が暗闇に手をかざすと、部屋中が淡く赤い光に照らされた。

全員驚くまでもない。皆、荷物を置いて座り込んだ。

翔一は軽くシャドーをした。悪くない。動きの切れは自分が一番分かる。それを見て、山内美羽が言った。

「翔一。今だからこそ話す。翔一のお父さん。ただ単に人を殺めたわけじゃないよ。」

翔一はその言葉に、打ち込んだ右ストレートを止め、美羽をみつ

めた。

「どういう・・・ことだ・・・？」

いぶかしげな表情を浮かべる翔一に美羽が答える。

「私のお父さんと、翔一のお父さんは知り合いでね。私が翔一の事・・・あったから、お父さんは何回も面会に行つて話を聞いたそうなの。そして、やっと真相を話してくれた。この旅行に来る寸前に。」

全員が耳を傾ける。寺道も難しい顔をしている。

「翔一が、アマチュアの試合で負けたことがあつた日、一人のボクシングマニアみたいな奴が、翔一のお父さんに文句をつけたらしいの。あんなクソみたいなもんボクシングじゃない。才能がない。やっている意味が無い。金の無駄。とにかく、翔一の事を滅茶苦茶に言つてたそうよ。お父さんは、大人の対応をしたらしいけど、しまいには相手はお父さんの襟首を掴んできたらしいの。そして、ガキも雑魚なら父親はもつとカスだなんて・・・。それで、殴り合いになつて、ちよつとのパンチが当たつて、結果、相手は打ち所が悪くて死んだみたい。」

翔一は拳を握り締めて震えていた。唇をぎゅっとかみ締める。

「だけど、警察にも全部俺が悪い。と言つたらしい。全部全ての罪を償うつもりだったらしい。私のお父さんに、翔一のお父さんは言つたらしいよ。人にボクシングを使うなって。絶対にそれはやっちゃいけないって。それをしてしまったお父さんは、自分を責めているらしいわ・・・。これが、真実。昔の翔一に戻ったから、全て

を話した。もう・・・死ぬかもしれないしね。」

そう言っ て美羽は涙を浮かべた。翔一は自分の右手の拳を見た。

（くそおやじ・・・。馬鹿野郎・・・。かつこつけやがって・・・。

）

翔一は美羽に近づいていった。そして言った。

「ありがとな。俺の拳は親父から受け継いだもの・・・だ。血牙
なんかに負けるかよ。お前ら全員守ってやるからな！」

翔一は奮起した。ただ単に単純な理由で、人を撲殺したと思っ て
いた父。だが、それは違った。自分の事ならばいい。それよりも息
子を侮辱され続けた上に、暴力を受けた上での正当防衛。だが彼の
父親は元プロボクサー。素人など、簡単に殺してしまう。美羽が続
ける。

「私は、翔一が好きだった・・・。みんなの前だけど、この際ど
うでもいい。小さい頃身体が弱くて、陸上を始めた。翔一も、芳美
もずっと自分の好きなスポーツを続けてきた。タイムが出ない時で
も、翔一は私を励ましてくれたよね。ずっと、好きだったんだよ。
今は、違う人が好きだけどね！」

そう言っ て美羽は泣きながら微笑んだ。翔一は美羽の頭を撫でる。
芳美が寄り添った。

「山内の好きな男が海野じゃねえなら、誰だよ？俺か？」

小林がにやけながら言っ た。美羽が恐ろしい眼力で小林を睨みつ

ける。小林はたじろいだ。

「海野」

木村が翔一に近づいてきて、素早いジャブを打つ。左にパリイしながらジャブを返す。連打を打ってくる木村。翔一は、膝を使って避け、軽めに木村の頬に左フックを打つ。木村も右フックを返した。両者がにやりと笑った。

「全部終わったら、俺と勝負してくれ。」

木村が翔一に言った。翔一はただ一言、

「ああ。」

と答えた。そして隅に座り込んでいた、氷室が口を開く。

「木村は能力とかいうのがなくても、雑魚相手ならそこそこやる・・・。問題は、山瀬と小林だ・・・。お前らここに残れ・・・。役に立たねえし・・・邪魔だ・・・。」

冷ややかに喋る氷室。山瀬が立ち上がった。

「ば・・・僕も・・・何か手伝える事があれば・・・。」

震えながら必死で喋る山瀬。その山瀬に小林が蹴りを入れた。

「俺より雑魚のお前が！何が出来る？ああ？まず最初にお前が死ぬんだよ。ああ、そうだな。俺の盾になれ。それが一番いい。」

小林がそう言った瞬間。氷室が小林を投げ飛ばした。そして馬乗りになり、一言。

「化け物に殺られる前に・・・今・・・死ぬか？」

木村は、ごめんなさい！ごめんなさい！と繰り返す。全員こいつは懲りない奴だと思った。芳美が翔一に声をかける。

「海野のグローブ。木村君にあげたら？バンテージっていうのも能力解放したら必要ないんじゃない？」

そう言われた翔一は、バッグからグローブとバンテージを取り出した。そして木村に渡す。

「こないいやつ・・・いいのか？菅野、海野。」

二人は頷く。木村は喜んでバンテージを巻きだした。翔一の汗が染み込んでいる。そしてグローブをはめ、素早い一撃を放った。凄まじい切れ味である。

安藤は、隅で素振りをしていた。最初の血牙が襲って来た時、もしもあの崖をよじ登ってこなかったら、彼は死んでいた。そして、このメンバーの主力となっている安藤が、存在しなかった事になる。

「山内の好きな男って、俺じゃないよな？」

素振りをしながら、美羽を見ずに言った。もう半ばヤケクソだった。

「内緒。島を脱出出来たら教える。」

ちえつと舌を鳴らす安藤。皆が笑った。芳美が翔一に語りかける。

「沢山の人が死んだね……。先生達、クラスメイト、そして桐谷……。私たちは、桐谷のお陰で今こうして生きていられるんだよね。海野……。私は貴方を守る。だから……。君も私を守って。」

芳美は翔一の目をずっと見続ける。翔一も反らさない。

「大丈夫。俺の拳には桐谷と、そして親父の力、この島の神様の力が宿ってる。菅野も他の奴も全員を守るから。一緒に、本土に帰ろう！」

翔一はそう言うと、芳美の頭を撫でた。

そして、1時間ほどの休息をえた。皆の体力は全快には至らなかったが、ほぼ回復した。寺道が口を開いた。

「よし、行こう。もう濃霧の神木までは、すぐだ。小林君。いい加減に邪念を捨てよ。そのままでは、血牙一族を治める事は出来ぬし、戦闘に置いても皆の士気が乱れる。いいか？戦場でもその気持ちを持つならば、容赦なく切り捨てる。覚悟しておけ！では行こう皆！」

全員がキリッとした表情で寺道に付いていく。小林は、自分に問いかけていた。助かるためには、邪念を捨てる……。ただそれだけ。

「濃霧の神木」と呼ばれるものは、とてつもない大樹だった。そして、周りは断崖絶壁。落ちたら一たまりもない。

「寺道さん！戦いにくくないか？」

翔一が尋ねると、寺道が答える。

「狭い上に、落ちたら最後だ。だが、奴らの数は150を超える。四方八方から囲まれれば一たまりもない。

先ほどの要領で戦いを挑む。この濃霧の神木は血牙一族を人間と同じにする力が秘められているらしい。だが、そのためには、五人以上が、この木に同時に触れ『気』を送らねばならない。奴らと対峙している時にな。」

皆が絶句した。ただでさえ戦力が少ないのに、そんな事をする暇があるのか……。皆は思った。

「無理ならば総力戦で奴らと争うしかない。おぬし達が決めろ。」

その時、寺道の脳裏に声が聞こえてきた。

（長の珠美だ。全勢力を持つて、お前たちを皆殺しに来た。我が一族の力を思い知るが良い。濃霧の神木で対決とは考えたな……。だが、万に一つも勝ち目はない……。私と、父、母、全ての一族を相手に、何処まで楽しませてくれるか。獲物たちよ！せいぜいあがくが良い！）

そうして伝心は途切れた。寺道が言う。

「皆、来るぞ。気を引き締める。私がなんとかする。絶対に諦めるな！」

今、血牙一族と、人間の決戦が始まろうとしていた。

血戦

霧が立ち込める。血牙一族がこの断崖絶壁の地にやってきた証拠だ。皆が構えた。

寺道は血霧丸を大きく掲げた。そして数珠をかけ、叫ぶ。

「視界を妨げし濃霧よ！神刀・血霧丸の名に於いて命ずる！滅せよ！大霧滅消！」

地面が揺れ、周りの空気がざわめく。前回ムガと戦った時よりも遥かに巨大な光の玉が上空に現れた。霧がサーと消えていく。寺道は強力な力を使いすぎたのが、片膝をついた。だが血霧丸を地面に刺し、立ち上がる。

目の前には、先頭に珠美、ジュレイ、そして、身の丈10メートルを超える、血牙一族最強の男が立っている。その後ろには無数の数の一族が唸りを上げている。珠美が言った。

「決着の時だな・・・寺道・・・」

「大神光の法を使った。お前達以外の雑魚はしばらくは動けぬ。これで、五分と五分だ・・・もう何も言う事はない。かかつてるがよい・・・」

そう言つて寺道師道は刀を横に構える。セツエイが首を回しながら言った。

「寺道。勿体ねえ程いい女だなあ。おっと、母ちゃん今の失言ね。いくぞ珠美、母ちゃん！」

ジュレイが変身し、実体を現す。前回と違い、体中に50cm程の太い針が飛び出している。

セツエイは信じられない程のスピードで寺道に襲いかかった。瞬時に血霧丸を構えるが、物凄い力でねじ伏せられる。

翔一と氷室が力を解放した。木村はその隙に、動けなくなっている雑魚達を撲殺しに向かう。単身で。

それに気づいた珠美が、一瞬にして木村の首を掴む。

「死ね。」

珠美は木村の首に力を込めた。その瞬間、美羽が神速を解放。木村を救い出し、後方に連れ出す。すぐに能力を解く美羽。

「くそ・・・神速か・・・あの娘から殺さねばならぬ・・・」

「

珠美は美羽へと浮遊しながら近づいていく。芳美が力を解放し、光の矢がまさに「光速」で珠美の肩を貫いた。

躊躇なく珠美を矢で串刺しにする芳美。珠美は空中から力なく崩れ落ちた。力を解く芳美。

「おのれ・・・おのれー!!」

珠美が叫ぶと、辺り一面を強風が荒れ狂った。そこに居た者たち全員が、立っているのが精一杯である。

寺道が叫ぶ。

「翔一君！こいつを頼む！」

翔一は寺道と対峙しているセツエイと向き合った。巨大すぎる。セツエイはニヤリと笑った。

セツエイの爪を拳で打ち砕く翔一。セツエイは大きく笑った。そしてもう一方の爪を翔一に振りかざすが、あっという間に避けられ、腹に光速の拳の嵐を浴びせられた。たまらず、血を吐いたセツエイ。翔一は逃すことなく。接近し、セツエイの顎を打ち砕く。肉片が飛び散る。倒れたセツエイの顔面目掛けて、何度も何度も拳を振りかざした。完全にセツエイの頭部は破壊され、動かなくなった。翔一の方が・・・強すぎた。血牙一最強の男を瞬時に倒したのである。

珠美がもがきながら叫ぶ、

「人間如きが！ふざけるな！」

そして、上空の光の玉に、手をかざし何かを叫ぶ。光が徐々に弱まっていく。

雑魚の血牙達が、襲い始める。安藤が力を解放をした。そして、美羽に頷くと木村も前線へとかける。

安藤一人で、雑魚血牙達は敵ではない。濃霧の神の力を得たバツトは、一振りで、雑魚達をなぎ払っていく。木村も、持ち前のフットワークと拳を武器に、一匹一匹確実に仕留めていった。

ジュレイと対峙していた氷室は、その体中から張り巡らされている金属に苦戦していた。蹴りや突きを放つと、こちらの力の強さで逆に自分に傷がつく。ジュレイは夫があっけなく倒されたのを知っていたが、予想はしていた事だった。

段々と氷室が押され始める。だが、氷室は気づいた。俺は今だけ

空手家だと。

高く宙に跳んだ氷室は、ジュレイの頭部に回し蹴りを放った。空中で二回転する。

頭部が欠け、吹き飛ぶジュレイ。氷室は限界を感じ能力を解いた。翔一もセツイイを倒した後、能力を解いた。

二人とも倒れる。すぐに美羽が神速で二人を大木へと運ぶ。

珠美と寺道は、光の玉を巡って、力をお互いに出し切っていた。両方が口から血が流れ出す。玉が消えれば血牙一族の勝利。それは翔一達の死を意味する。

安藤と木村は50以上の血牙を倒したが、安藤の活動時間が限界にきたため、大木へ木村を抱えて走る。能力を解いた途端。苦痛にもがいた。吐血する。かなり制約時間をオーバーした。

氷室と翔一も動けない。そして寺道は光が消滅しないように、必死で念じる。若者達を信じて。

現在動けるのは、美羽、芳美、祐樹、山瀬、小林だけだった。

先程氷室に蹴られたジュレイは、頭部を再生し、また立ち上がった。祐樹は思った。自分の能力で、珠美を殺せば。しかし……。弱っている皆に襲い掛かるジュレイ。祐樹は力を解放した。ジュレイへ光滅の能力を使う。

眩い光と共に、ジュレイは碎け散った。そして無となった。

珠美が「母様！」と叫ぶ。だがそこにはもう何もない。

「ゲオオオオオ！ニンゲンフゼイガ！」

珠美が叫ぶ、瞬時に辺り一面が雲に覆われ、雷が轟いた。そして雑魚血牙達の動きが俊敏になる。芳美が力を解放し、珠美に幾つもの矢を放つが、片手で止める。珠美の手にも光が纏われていた。

「ホロブガイイ・・・オマエタチナド・・・」

珠美の身体から、紫色の煙が立ち上がる。そして寺道は神木へと叩きつけられた。他の全員が動く事が出来ない。目の前には100以上の血牙達が迫っている。芳美も祐樹も力を使い果たし、動けなくなる。美羽は無理して二人を助け出し、全員が神木まで追い詰められた。

寺道が言った。

「ここにいる全員で、この木に手をあてる。そして願え。何でもいい。楽しい事、嬉しい事、血牙達が迫害される事もなく、何処に行ってもヒトとして生きていける事。ただ・・・、この気は完全なる『正』、『負』の気が少しでもあれば、死ぬ。皆の正しき心により、木から光が上空へと登るはずだ。」

寺道が最初に触れる。

翔一は這いながら木に手をつけた。そして芳美。美羽。木村。祐樹。安藤。そして氷室も・・・。小林もやりたくはなかったが、「死にたくはねえ！」と言って、木に触れた。皆が強く願い、巨大な光が曇った上空へと向かっていく。

だが、後少しだけ足りない。まだ一人いる。山瀬だ。山瀬は震えている。

「僕は死にたくない・・・死にたくない・・・。」

氷室が叫ぶ。

「このまま居ても・・・どうせ死ぬんだ・・・。懸けて見る。最後ぐらい・・・男見せてみる！」

それでも山瀬は躊躇している。氷室が一旦木から離れて、山瀬を連れて行こうとした。その瞬間、山瀬の頭部が無惨に砕け散った。頭から流血し倒れる山瀬。少し離れた所から珠美が能力で山瀬を殺したのだ。

次に小林が宙に浮き、そのまま崖の下へと落とされた。怒った残りの者は全員能力を解放した。皆思った。

「命を捨てても構わない。全力で血牙一族を殺しに行く。」

寺道は珠美と対峙し、静かにこう言った。

「やはり、お前達は、受け入れなかったのだな。若き者達の純粋な心を・・・。」

そうして寺道から巨大な光が発せられた。そこに居た珠美、翔一達、血牙一族も目を開けることが出来ない。

「海野君。血霧丸を持て！そして全員海野君の近くに集まれ。投げるぞ！」

物凄いスピードで血霧丸が翔一に投げられた。しかし、能力を解

放している、翔一は簡単にそれを受け取った。

「どういうことだ？寺道さ・・・」

「いいから早く！海野君の周りに集まれ！」

生き残った全員が集まる。そして寺道は言った。

「我々一族の真の役目。人か血牙どちらが滅んだ時、この島ごと消すのが我々の役目だ・・・。短い間だったが、純真というものを教えてもらい。有り難かった。珠美、そして血牙一族よ。済まない。」

そついうと寺道は濃霧の神木に手を当て叫んだ。

「滅・濃・島・光・牙！」

島全体が巨大な光に纏われる。翔一達の周りは木々や、地面、全てが崩壊していく。海は荒れ狂い、血牙一族は光に飲み込まれるように消え、珠美も姿を失った。そして島は、姿を完全に消した。

翔一は気が付くと、島に向かうための波止場に倒れていた。周りを見渡すと、全員無事だった。寺道を除いて。

ここから見えたはずの小さな島は、跡形もなくなっていた。翔一はポケットに何かがある事に木がついた。小型のナイフである・・・。

「これは・・・。」

それは血霧丸が小さくなったようなものであった。それを大切に

ポケットにしまい。翔一は皆を起こした。

朝日が昇ってきていた。ついに島から脱出出来た。全員無言で太陽をみつめる。

生きている。ただそれだけが、こんなに素晴らしい事であるとは、誰も思っていなかった。

エピローグ

濃霧島の事は、生き残った翔一、美羽、芳美、祐樹、安藤、氷室、木村の七人しかなぜか覚えていなかった。学校で聞いても、死んだ人間の存在自体が無かった事になっている。無論ネットで島の事を探しても、一切載っていない。

だが、確かに七人は覚えていた。あの惨劇と、悲しい一族の物語を。そして自分達を命を張って助けてくれた美しい女性、寺道師道の事を。

普通の学生生活に戻った7人。

翔一は、父親に面会に行った。相手は酷く驚いていたが、プロを目指すと言ったら顔を綻ばせて喜んでいた。

翔一は、木村の通っているボクシングジムに通い出す。

木村と翔一は良きライバルであり、親友となった。木村は不良みtainな事は辞め、完全にボクシングの世界に浸っていた。お互い切磋琢磨する。良きジム仲間である。

安藤は親友の無くなったセカンドを埋めるため、必死で野球部の練習に取り組んだ。古賀自体の存在も人々の記憶から無くなっている為、やり切れない思いがあったが、来年の夏の甲子園を目指すため、日々頑張っている。

祐樹は必死になってパソコンで、あの島の事を調べつくしたが、全く情報は出てこなかった。変わりに自分で濃霧島での出来事のサイトを立ち上げた。以外に好評でアクセスはあったが、やりきれな

い気持ちはあった。

芳美は弓道で全国大会を目指し、見事個人で優勝を果たした。彼女の大切な母親の思いが、通じたのか。

美羽は、記録保持者として、また大会に臨む。女王の座を受け渡すわけにはいかなかった。

そして氷室仁。彼は桐谷の通っていた空手の道場の門を叩いた。凄まじいスピードでメキメキと実力つけていく氷室。ただでさえ、恐れられている存在なのに、誰も齒向かうもの等なく、氷室も不良を引退し、空手にのめりこんでいった。それは桐谷への思いもあったからである。

ある晴れた日曜日。翔一と芳美。そして美羽と祐樹は、遊園地でダブルデートをしていた。デートと言っても付き合っているわけではない。美羽が誘ったのだ。

美羽がお化け屋敷に入りたいと言い出し、翔一と芳美が入ることになった。かなり本格的な造り、翔一も実は怖かった。殴り合いよりも怖い。

「ちよつと……。これ洒落にならないよ……。」

芳美が翔一の腕を掴んできた。「ちよつと、おい。」と驚く翔一。

「あのだ。」

「なんだ？」

「もう・・・みんなの事は守ったんだから、これからは私だけを
守ってよ。」

翔一は心臓が破裂しそうになった。芳美がギュッと翔一の腕を掴
む。

翔一は、芳美の手を握った。

「くさい台詞けど・・・お前だけのSPに・・・なつてやるよ。」

そう言つて、芳美を抱き寄せた。芳美は翔一に身体を預けた。抱
きしめる手が震える。

中学の頃まで、翔一と美羽はお互い惹かれあっていた。しかし、あ
の事件を境に二人の仲は険悪になった。だが芳美は幼少の頃から翔
一の事が好きだったのである。十年越しの恋が、稔った。芳美はう
れし涙を流す。

その後ろには美羽と祐樹がいる。二人とも絶句した。

「な・・・なに、出来ていやがるんだあの二人・・・。」

祐樹は顔面が真っ赤だった。美羽が言う。

「あんたもさ。彼女作れば？目の前に結構いい女の子いると
思っただけど？」

そう言つて美羽は祐樹に微笑んだ。

「は！？え！？それって!？」

美羽は祐樹の手を取った。祐樹も驚きながらもその手を握り返す。

美羽は幸せだった。見た目とは裏腹に、翔一よりも心の強さを持った祐樹を、彼女は想っていた。

惨劇を忘れる事は出来ないだろう。だが、七人にはかけがえの無い大切な物が出来た。

あの悲劇を忘れる事が出来なくとも、彼らは強く逞しく成長していく。

お化け屋敷から出て、翔一がミニ血霧丸を皆の前でかざすと、一瞬キラキラと光輝いた。

それはまるで、四人を寺道が祝福しているように見えた……。

了

エピローグ（後書き）

読了ありがとうございました。

僕の作品としては、初めてしっかりと構想を練ってから書き始めました。

それでも、やはり途中で変わった設定は多かったです。

当初はゾンビ系で、逃げ惑う人々というのを描こうと思っていたのですが、テーマは「友情」でしたので、ゾンビの群れに襲われるという描写は無くなりました。その辺をご期待下さった方々には申し訳ありません。

ゾンビ系の作品を書かれてる片は他にも沢山いらっしゃるので、こういうお話も良いかなと思いました。

「蠢く死体・・・」の後書きで宣伝し、こちらを読了して頂いた方々、本当にありがとうございました。

やはり、読者の方がいるという事は執筆の原動力になります。もし、ゾンビ系の話をまた書くとするならば、「蠢く・・・」や「濃霧・・・」の様な軽いものではなく、本格的な物を書こうと思っています。

一人でも多くの方に心に残って頂ければ幸いです。

本当にありがとうございました！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9584n/>

濃霧一人を喰らいし者達

2011年4月13日21時50分発行